

Ethnic Groups in Border Regions of China in Historical Times : An Appraisal of “Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas” by Wolfram Eberhard. Part II : Ethnic Groups in Southern Regions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大林, 太良 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004182

中国辺境諸民族の文化と居住地

——エーバーハルト説の紹介と評価——

そのⅡ．南方辺境諸民族

大 林 太 良

Ethnic Groups in Border Regions of China in Historical Times:
An Appraisal of “Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas”
by Wolfram Eberhard.

Part II: Ethnic Groups in Southern Regions

Taryo OBAYASHI

Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas by Eberhard is a classic in the historical ethnology of China, in which he put together a great amount of material and analysed and classified ethnic groups in the border regions of China in historical times. Peoples in the border regions of the south were classified by him into 11 categories: (1) the Chuang peoples, (2) the Yao peoples, (3) the Li peoples, (4) the Kelao peoples, (5) the Liao peoples, (6) the Miao peoples, (7) the Pa peoples, (8) the Paiman peoples, (9) the Tan peoples, (10) the Yüeh peoples, and (11) other peoples. In addition to these, two other categories from among the ethnic groups of the western border regions, i.e. (1) the Fan peoples and (2) the Wuman peoples, should be taken into consideration in the discussion of his conception of the ethnic and cultural history of southern China.

Each category of southern peoples represents a culture complex, characterized by a series of culture features, among others the type of subsistence economy. Eberhard recognizes the Yao peoples with swidden cultivation, and the Chuang peoples, equivalent to the Tai culture of his *Lokalkulturen*, with rice cultivation in wet fields, as two major and

* 東京女子大学，国立民族学博物館共同研究員

Key Words : southern China, historical ethnology, classification of peoples, culture complex, Eberhard

キーワード：中国南部，歴史民族学，民族分類，文化複合，エーバーハルト

fundamental categories, while most of the others, excepting perhaps the Liao, according to him, are either derivatives from these two fundamental ones or later developments resulting from a mixture of one or both of these major ones with each other or some others. This theory seems to be sound in the main. He includes with foresight the Yüeh and the Pa in his research on the southern peoples.

In spite of these merits, the volume contains some shortcomings and views hard to accept. He often relies not on primary sources but on secondary compilatory works for the material. He treats the Yao and the Miao separately, without paying due attention to the fact that both belong to the same family linguistically. Generally speaking, Eberhard's hypotheses concerning the linguistic position of each category are weakly founded, and sometimes quite disputable, such as the supposition that the Yao and the Yüeh are Austronesian speakers and the Liao Austroasian speakers.

He gives no serious consideration to interethnic relations between the Han Chinese and the border peoples. He also underestimates the changes which took place in the ways of life of the peoples through the ages, particularly the change from swidden cultivation to wet rice agriculture among many peoples in the south during the period from the Tang through the Sung ages.

Eberhard's investigation certainly has a series of points open to criticism, yet it retains its position as a classic in the ethnic and cultural history of China, with its wealth of information and, last but not least, numerous insights and suggestions for further research.

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1. はじめに | 1. 南方辺境諸民族の構成 |
| 2. エーバーハルトによる南方辺境諸民族 | 3. 西方辺境の二つの民族群 |
| a. チワン諸民族 | a. 番諸民族 |
| b. ヤオ諸民族 | b. 烏蛮諸民族 |
| c. リ諸民族 | 4. 諸地方文化との比較 |
| d. ケラオ諸民族 | 5. エーバーハルト説の問題点 |
| e. リャオ諸民族 | a. 一般的评价と批判 |
| f. ミャオ諸民族 | b. ミャオ=ヤオ諸民族 |
| g. 巴諸民族 | c. 越とヤオとタイ |
| h. 白蛮諸民族 | d. 巴と蛮と僚と |
| i. 蠻諸民族 | e. 番とは何か |
| j. 越諸民族 | f. 白蛮と烏蛮 |
| k. その他諸民族 | 6. 結論 |

1. はじめに¹⁾

ヴォルフラム・エーバーハルトの『中国辺境諸民族の文化と居住地』[EBERHARD 1942a] は、中国大陸の民族史、文化史への注目すべき貢献であった。私は別稿において同書の大筋の紹介と、全体的、一般的な評価を試みた[大林 1995]。しかし、同書やそもそもエーバーハルトの構想の本格的な検討は、このような一般的、全体的なものだけでは充分ではない。個別的な問題についての彼の見解を詳しく吟味してはじめて、エーバーハルトの研究の本格的な評価も可能であり、また彼の労作に含まれた興味深い着想を我われがさらに発展させていくことも可能になるであろう。そのような意味で、私はここに同書の南方辺境諸民族についての部分を取り上げ、検討してみることにした。

2. エーバーハルトによる南方辺境諸民族

『中国辺境諸民族の文化と居住地』は、中国史上に登場する800種の辺境諸民族を大きく北方辺境諸民族、西方辺境諸民族、南方辺境諸民族に分け、そのほか伝説的諸民族と古代諸民族という部類を立てている。古代諸民族というのは漢代以前の辺境諸民族のことである。

ここで我われが取り上げる南方辺境諸民族は、(l) チワン(獯)諸民族、(m) ヤオ(猺)諸民族、(n) リ(黎)諸民族、(o) ケラオ(玃狁)諸民族、(p) リャオ(獠)諸民族、(q) ミャオ(苗)諸民族、(r) 巴諸民族、(s) 白蛮諸民族、(t) 蠻諸民族、(u) 越諸民族、(v) その他の諸民族の11小群に分けられている。これからこの順で紹介することにして。

a. チワン諸民族

エーバーハルトがチワン系民族として挙げたのは、次の25民族である。仡獴、卡獴、独家、清江独家、清独家、青独家、獴、独家、黒独家、黒獴、狗耳竜家、老獴(老獴)、竜家(苗)、馬蹏竜家、木邦、獴(儂)、白独家、白竜家、補竜独家、沙人、大頭竜家、曾竹竜家、洞家苗、峒(=獴、洞)、洞苗、獯人[EBERHARD 1942a: 176-192]。

1) 本論文は1994-1996年度文部省科学研究費「多民族国家・中国における民族関係についての総合的研究」(代表者 塚田誠之、課題番号06044239)による研究成果の一部である。

これを見てもわかるようにエーバーハルトのチワン系諸民族は大体広西のタイ系諸民族である。ただ貴州の各種の「竜家」は、系統が現在も不明であるから、すべてがタイ系諸族とは言えない。それはともかくとして、彼によれば、これら25種族は本質的には統一的な文化をもっている。これらの文化はタイ文化と見なしてよい。報告は比較的遅くはじまり、宋代になってからで現代に至るまでのものである。遅くなって登場した理由は、チワン諸族が居住する今日の広西、貴州の両省は、漢民族によって遅くなってはじめて開発されたためである。唐代の資料はなるほど広西を知っているが、チワン諸民族については何もこれと言った報告をしていない。エーバーハルトは別の方法論で行なった『古代中国における地方文化』の研究にもとづいて、チワン諸族はかつてはるか北に住んでいたのもので、そのため彼らは大変急速に中国高文化の組織の中にくみ込まれてしまったのだと想定しなくてはならないと言っている。おまけに彼らは北部諸地域でも、ただひとりで住んでいたのではなく、ヤオ諸族や越諸族と混ざって住んでいたのもので、古代において民族的単位としては現われなかったのである。広西において漢族植民者は、まだタイ族が残っていたのを見出し、特別の群として認め、取り扱ったのであった。

これら南方のチワン諸族の文化は、一種の農耕文化、多分主として水稻耕作を伴った文化である。ただ山中に圧迫された場合は違う。他の諸文化と対照をなすこの文化の特徴は次のとおりである。

経済形態——水稻耕作を行ない河谷に拡がり、できる限り山地を避ける。牛（あるいは水牛）は重要だが、生産手段としてよりもむしろ主に価値の尺度として重要である。

社会組織——クランが存在するが、漢族と違って、必ずしも外婚が支配的なのではない。通常は祖先祭祀がある。結婚は仲介者なしに、ふつう祭りの時に自由に決められる。しかし妻は最初の子供が生れるまで彼女の両親のところにとどまっている（つまり不落夫家である）。その時になって彼女はやっと夫の家に移り住み、結婚したと見なされる。豊穰儀礼と性的自由を伴う春の祭り（歌垣）が催される。恋人同士のまり投げ、帯の交換は、ともに同意のしるしである。祭りの時に踊と歌競争がある。祭りの時は柱立てが行なわれる。

宗教——報告がほとんどない。呪術師がおり、動物への変身への信仰がある。蠱毒が極めて特徴的である。

死者祭祀——火葬と並んで棺があり、二次的に棺を放棄することが行なわれる。し

かし火葬は二次的な習俗らしい。

物資文化——高床家屋（欄）。蠟結染め（バティック）と絣染め（イカット）。しばしばプリーツのある短いスカート，髻（Chui-Frisur）。文身。帽子あるいはターバン。飲むための吹管あるいは鼻飲。弩。水を好む。

この文化は多くの場所でヤオ文化によってひどく重層されて、その結果変容してしまった。他の地点ではことによるとチワン文化の影響をうけてできたミャオ文化により、逆にチワン族が影響をうけたらしい [EBERHARD 1942a: 195-196]。

b. ヤオ諸民族

エーバーハルトは、ヤオ系民族として次の40民族を取り上げた。長髮瑤，曲江瑤，住瑤，黒瑤，畚民，花藍瑤，花肚瑤，紅頭瑤，紅瑤，狗瑤，過山瑤，藍雷，藍靛瑤，令勾瑤，流瑤，羅旁瑤，梅山蛮，莫瑤，納垢，八砦瑤，白瑤，槃瓠蛮，槃古瑤，板瑤，平地瑤，山子，山瑤，上山瑤，大良瑤，藤峽瑤，頂板瑤，汀瑤，墮民，峒瑤，外瑤，五溪民（蛮？），武陵蛮，五水蛮，武寧蛮，瑤である [EBERHARD 1942a: 196-216]²⁾。

これら諸族についての記述をもとに、エーバーハルトはヤオ系諸族はみな統一的な文化（*einheitliche Kultur*）をもち、したがって一括するのは正当だと考えた。

ヤオ系諸族ははじめ蛮という名で今日の湖南省に出現し、宋代以後、瑤という名で雲南や四川から浙江にいたるまで広く分布している。

ヤオ族がどの大民族群に入るのか言うのは難しい。彼らが言語的にしばしばタイ系諸族に同化したことは、何事も証明しない。浙江のヤオ族（墮民）はその言語を完全に放棄し、中国語を話しているのだ。それ以外にも、タイの影響はヤオ系諸族の文化に及んだことが予想され、実証されている。彼らの文化はオーストロアジア語族（中国南西のワ族などの彼のいわゆる k 群）と共通するところは多くない。そこでエーバーハルトは、ヤオ系諸族をオーストロネシア諸族の初期の一つの群だという説を提案したのであった。

ヤオ系諸民族の文化はエーバーハルトによれば次のように要約できる。

経済形態——焼畑耕作を伴った山地生活。これは居住地をしばしば移転することを余儀なくさせる。これと並んで狩猟と採集活動が行なわれる。主としてイモ類が栽培される。

社会組織——首長制も部族組織も本格的に発達しておらず、反対に父系的なクラン

2) エーバーハルトは当常用されていた瑤の字を用いているが、ここでは今日の用法に従い瑤に改めた。同様な措置は以下の他の民族名の表記についても行なった。

が強固に発達している。外婚制が行なわれ、交叉イトコ婚もまれでない。豊穡儀礼の性格をもち、性的自由を伴った舞踊祭、掛け合い歌、自由結婚。結婚式は子供が生れてはじめて行なわれる。成年式、一種のシャマニズムがある。

宗 教——犬神槃瓠の崇拜、犬についてのタブーがある。また虎についてのタブーと虎崇拜もある。年末に籬、つまり精霊を追い出す儀式が行なわれ、その際、仮面仮装者が登場する。位牌はないが祖先崇拜はある。

死者祭祀——棺にいれる埋葬。棺はおそらく元来は簡単な木の幹をくり抜いただけのものだったろう。

物質文化——平たい土地に建てた一階建の家で、居住用テラスを伴っていない。家の中心をなすのは炉で、そのまわりに人々は寝る。方形家屋の一部分が炊事用に使われる。ここは前の炉とは別の炊事用の火がある。家屋はおそらくたんに小家族一つだけに対してのものである。幅狭い布で作った短いスカート。裸足で歩行、精巧な髪かたち。衣服はしばしば犬祖神話と関係がある。背の荷物を額帯で運ぶ [EBERHARD 1942a: 220-221]。

そのほか、エーバーハルトがヤオ系諸文化について述べていることの中で重要なことは、ヤオ系諸民族とその文化の形成についての彼の説である。エーバーハルトは焼畑耕作という経済形態と、父系クラン組織をヤオ諸族にとって典型的なものとしているが、それ以外の構成要素も考えている。

a. チワン文化、つまりタイ系諸族の文化からの要素。タイ系諸族とヤオ系諸族はしばしば一緒に住み接触してきた。その結果、ヤオ族は所によってはタイ系諸族の衣服を受容し、一部は水田稲作も受容した。更に、牛がヤオ族のところで特に重要な場合があるが、エーバーハルトの推測ではこれはヤオ族固有のものではなく、タイ系諸族との接触を通じて、ことによると越文化との接触によっても、ヤオ族のところにってきたものなのである。

b. その他。ヤオ族では新年は7月（ママ）14日か15日だったらしく、ヤオ族の一番重要な神である槃瓠への供犠も、この日に行なわれたものらしい。これから見て満月を基準にする暦があったらしい。ヤオ族に元来、固有の暦があったか否かは問題であるが、後になると満月暦とそれに属する年中行事が彼らの文化にすっかり根を下ろした。蠱毒やさまざまな占いの方法がヤオ文化に帰属するものかどうかについては、エーバーハルトは確信をもっていない。

布の幅が狭いための短いスカートを穿く習慣は、リ（黎）諸族にもある。しかし、布を縦にすればスカートを長くできるわけだから、原始的な織機で幅の狭い布しか出来ないので必ず短いスカートというわけではない [EBERHARD 1942a: 218-219]。

c. リ諸民族

エーバーハルトはリ（黎）諸民族として、産里、獐，黎，俚，里の五つを挙げた [EBERHARD 1942a: 221-226]。これらは中国人によって互いに親縁だと見なされた民族であって、海南島，その他広東と広西の一部に住んでいる。ただ産里だけは雲南省西南部とミャンマーに住むと報ぜられ、資料不足のため、中国人が言うようにリ群に入るかどうか証明できない [EBERHARD 1942a: 227]。

リ諸民族の文化は宋代ごろから知られており、今日ではチワン族の文化に極めて近い親縁関係をもっているように見える。それにも拘らず、エーバーハルトの考えでは、純粋なチワン文化と呼ぶのは適当でない。リ文化中には、ヤオ文化に結びつく諸要素がある。中国人はこれを感じとり、時にはチワン族もヤオ族もリ族から分れたのだと言ったりする。最後に、リ文化の中にはリャオ文化の諸要素も含まれている、と彼は信じている。そこで、エーバーハルトは、元来はヤオ族と親縁だが、リャオ族とも何かの関連をもつ民族だったのが、後になってチワン族によって極めて強く重層され、その結果ほとんど自らの文化を放棄してチワン化するに至ったのだ、と想定している。

リ文化のもっとも重要な特徴は次のとおりである。

経済形態——畑作作物の栽培、それと並んで狩猟。牛（あるいは水牛）の著しき強調。

社会組織——きわだった種族組織ないしクラン組織はない。したがって無条件的な外婚制もない。豊穰儀礼と性的自由を伴う春の祭。若者宿。自由結婚。結婚は子供の出産後発効する。

宗教——牛崇拜と牛供犠。近代のヨーロッパ人の報告によると牛角を柱の上に挿す。蠱呪術。

死者祭祀——報告なし。

物質文化——欄家屋（高床家屋）で丸天井の屋根がついている。貫頭衣、短いスカート、それに並んで桶状スカート。簾の帯。大きなかんざし、吸い筒。銅鼓と鼓祭。卵占い。文身、竹の弦のついた弓 [EBERHARD 1942a: 228-229]。

d. ケラオ諸民族

エーバーハルトはケラオ（仂佬）諸民族として次の17を挙げた。岐，仂人，仂佬，仂猫苗，剪毛仂佬，猪矢仂佬，苗仂佬，紅仂佬，獐佬，獐兜，鍋圈仂佬，休佬，被袍仂佬，水仂佬，打牙仂佬，土仂佬，桶桶仂佬である [EBERHARD 1942a: 229-235]。

エーバーハルトは、ケラオ諸民族は起源的にはリャオ族と一緒にだった蓋然性が高いと見る。しかし、リャオ族にとって典型的な文化要素をケラオ諸族は沢山は保存していない。ただ成年式儀礼としての抜歯だけである。リャオ諸族と共通の、そしてヤオ族とも共通の習俗は棺を放棄することである。リャオ諸族と共通であるが、他の民族にもあるのは貫頭衣である。

ケラオ諸族とリャオ族との相違点は、弓矢をもっていること、平地方形家屋、竜崇拜などである。ことによるとケラオ文化はチワン文化やヤオ文化の要素が著しく重層したため変容した古いリャオ文化と見なしてよかろう。これにうまく合うのはケラオ諸族がリャオ諸族の古い分布地域に住んでいるが、南のチワン族の古い領域に入ってくると、一層チワン族によって変容していることである。

ケラオ文化の特徴は次のとおりである。

経済形態——農耕だが、いかなる形式かは正確には判っていないが、おそらく焼畑耕作ではなかろう。牛飼育，狩猟。

社会組織——必ずしも外婚は行なわない。自由結婚。子供が生れてからの結婚式。

宗 教——竜崇拜。おそらく虎崇拜もある。

死者祭祀——丸木製の棺。これは後に放棄する。時には火葬。位牌あり。

物質文化——畑を伴う方形地上家屋。貫頭衣。時には桶状スカートと腰布 Hüft-tuch。不潔。弓矢 [EBERHARD 1942a: 236-237]。

e. リャオ諸民族

エーバーハルトは次の8民族をリャオ系民族として挙げた。飛頭僚，僚，木籠僚，南平蛮，鼻蛮，山僚，守宮僚，土僚で，四川から貴州，雲南，湖南，江西，福建をへて広東，広西に及び，時代も漢代から現代に及んでいる [EBERHARD 1942a: 237-246]。なお僚という字は lao という発音が正しいが『中国少数民族』編写組 1981: 490]，エーバーハルトは Liao と記しており，またラオスのラオ族との混同を避けるためにも，私もエーバーハルトに従ってリャオと記すことにしたい。

エーバーハルトはリャオ文化の特徴を次のようにまとめている。

経済形態——焼畑耕作あるいは狩猟（漁撈）だけ。家畜としてはおそらくとりわけ豚と犬。牛は後になってつけ加わった（このことはケラオにもあてはまる）。

社会組織——部族もクランもなく、首長もなく、例外的な場合に一種の指導者制がある。クーヴァード、数種のイニシエーション。

宗教——呪術信仰、頭蓋崇拜、人狩りおよびかつては食人俗。

死者祭祀——棺。これは放棄されるか、それとも立ったまま埋葬（以前は屈葬？）。

物質文化——干欄家屋（高床建築）で破風側に入口、つまり妻入りである。ポンチョ（貫頭衣）、手で食べる。青銅製容器と銅鼓（後には）信号楽器としての角。弓なし。ただ槍と楯と刀のみ。新生児は水中に置かれる。

そしてエーバーハルトによれば、リャオは南部においてのみチワン族の影響を受けたのであって、チワン族とリャオ族の間には次のような文化的相違がある。クーヴァード、イニシエーション儀礼としての抜歯、部族組織やクラン組織が完全に欠如していること、妊娠期間が短いと称されていること、新生児を水中に入れること、干欄と呼ばれる家屋形式、頭蓋崇拜。以上はすべて、この形ではチワン族にはないものである。またリャオ族は水田耕作を行わず、河谷居住の明瞭な偏好をもっていない。価値尺度としての牛がない。豊穰儀礼、歌合戦、帯の交換、球戯、踊りを伴った春の祭り、これはすべてない。蠟結染め、^{パティ}綵染めは報告されていない。スカート^{イカット}のひだも報告がない。一種の洗礼を除くと水を好むことはどこにも語られていない。

このようにリャオ文化はチワン文化と相違している。他方ではヤオ文化との類似点としては、犬の尊重がある。しかしリャオとヤオとの類似よりも相違のほうが大きく、類似は接触の結末と思われる。

エーバーハルトはリャオはオーストロアジア諸族と若干の親縁関係をもつが、肌の色があまり黒くない点が違っていると記しているが、オーストロアジア語族との共通要素が何かは明記していない。それにも拘らず、彼はリャオはオーストロアジア語族の古い群が、タイ語族によって大変強く、かつ早くから影響を受け、またヤオ族によっても変化を加えられたものであると考える。ケラオ族はリャオと近い親縁関係にあるらしい [EBERHARD 1942a: 249-250]。

f. ミャオ諸民族

エーバーハルトは次の65民族をミャオ系民族として取り扱った。長脚、鎮草苗、尖頂苗、赤苗、清江黒苗、箐苗、青苗、九股苗、九名九姓苗、車寨苗、穿青苗、川苗、

漢苗、黒脚苗、黒種苗、黒樓苗、黒苗、黒山苗、黒生苗、西溪苗、西苗、葫蘆苗、花衣苗、花苗、花背苗、黄斑苗、紅江苗、洪州苗、紅花苗、紅苗、高坡苗、高山苗、克孟拈羊苗、谷蘭苗、褲襠苗、郎慈苗、樓居黒苗、麻陽苗、賣耶苗、茆頭苗、苗、黒定苗、八寨黒苗、白苗、扁頭苗、平伐苗、山苗、生苗、水家苗、水西苗、宋家苗、蔡家、草塘苗、柴薑（姜）苗、短裙苗、洞苗、洞崽苗、雅雀苗、牙伐苗、鴨子苗、楊保苗、楊洞羅漢苗、夭苗、爺頭苗、巖苗である [EBERHARD 1942a: 250-270]。

これら諸族についての文献記録をもとに、エーバーハルトはミャオ系諸族について、次のように論じている。

彼はヤオ系諸族については、統一的な文化をもっていると考えたが、これに反して、ミャオ系諸族については、統一的な文化をもたず、極めてさまざまな要素の混合が認められると論じている。この混合においてはチワン（タイ）系要素とヤオ系要素とが圧倒的であるので、エーバーハルトは、ミャオ族は元来はヤオ族だったが、タイ系諸族と大幅に混合し、さらにミャオ族の祖先の番の場合と同様に、二次的に（チベット系の）烏蛮族が征服者として上層を形づくったのだと考えた。このような過程の結果、他の民族群とは外から見ても違う一群が形成された。

しかし、もっと詳しく分析してみると、ことによると資料が乏しいために一群をなしているとか、諸文化の混合だという印象を受けていただけであって、むしろある種族は大なり小なり一つの群に、他の種族は別の群に属しはするものの、どの種族も全面的にただ一つだけの群には属さないことが明らかになるかもしれない。つまりエーバーハルトはミャオ諸族の文化は複雑でヤオ系諸族ほど簡単に位置づけできないことを強調しているのである。

いわゆるミャオ文化の特徴は、エーバーハルトによると次のようなものである。

経済形態——山地耕作を伴う山地生活であって、おそらく焼畑を伴う掘棒耕の形式である。これと並んで狩猟と採集活動があり、時には牧畜もある。馬や羊を飼育する種族も少数あるが、その他の種族は牛か水牛を専門に飼っている。

社会組織——一部はクランをもつが、一部はもっていない。しばしば祖先崇拜が行なわれる。見たところ父系制が圧倒的らしい。春の祭りには豊穡儀礼と性的自由、まり投げ、掛け合い歌、鬼竿、若者宿を伴っている。男女間の帯の交換がある。犬供儀と虎祭祀もある。蠱毒と関連した5月5日の祭りがある。

宗 教——報告がほとんどない。

死者祭祀——棺に入れての埋葬，あるいは棺なしに巻いて埋葬したり，放棄したりする。

物質文化——ヤオ族のような炉のついた家屋や洞窟居住の他に欄家屋つまり高床家屋がある。しかしベッドはない。バティック染め（蠟結染め）と機織りが行なわれるが，フェルトもある。ポンチョ形式の衣服もある。短いスカートで，しばしばプリーツがある。脚絆，頭巾あるいは帽子。角形結髪と並んで椎髻，つまり髪を後ろにたれ，1たばねにしたまげ。銅鼓と木鼓。木を刻んで記憶の助けとする [EBERHARD 1942a: 274]。

そしてエーバーハルトはミャオ文化を構成する諸要素を次のように分けている。

a. チワン文化つまりタイ系文化。チワン文化の諸要素が他を圧してもっとも明瞭であり強力である。もっとも経済形態ではそうではない。と言うのはチワン族に反してミャオ族は典型的な山地住民だからである。ミャオ族はチワン族と同様に大きな春の祭りをもっており，大体《月の祭り》[跳月]と名づけられている。この祭りは豊穡儀礼の性格をもち，性的自由が許されている。この性的自由は野合，さらに後には本式の結婚に通じている。しかし，本式の結婚が行なわれたというのは，子供が生れた時になってはじめてである。それまでは妻は実家にとどまり，夫は彼女を訪問するだけである。この習俗は母系制と必ず関連をもつに違いない，というものではない。義理の両親のところに住むようになるのは，夫が妻の妊娠能力に確信をもち，その時になってはじめて贈物をしようとするのが理由である。夫がまだ贈物を支払わないうちは，妻を実家においておくというのは理解できることだ。

チワン族と同様，ミャオ族も春の祭りでの掛け合い歌，まり投げ，帯の交換を知っており，チワン族と同様に歌うのが好きだ。牛（あるいは水牛）はミャオ族のところでも大きな役割を果たす。彼らは諸族と同様に若者宿をもっている。若者宿はこれまた性的自由を伴った春の祭りの全複合体に属しているらしい。

5月5日の祭りは，チワン族にとって重要であるように，蠱毒の調製や理論と関連している。ミャオ族もこれを5月5日に調製する。彼らはチワン族と同様に鶏占いをもち，さらに卵占いや棒占いを行なっている。これら占いはなるほどさまざまな文化に由来するが，どれもこれもチワン文化にも存在している。

ミャオ族は欄家屋をもっているが，どうも一部だけらしい。彼らは蠟結染めや，プリーツスカートをもっている。そして少なくとも若干のものはチワン族と同様に水を好む。このようにチワン族との類似は全く大変大きい。

b. ヤオ文化。ヨーロッパ人ばかりでなく中国人もヤオ族とミャオ族をしばしば一

緒にした。たとえば海南島のミャオ族はヤオ族に近い。おまけに宋代以前はヤオもミャオも蛮と呼ばれ、その後もヤオをミャオと呼んだ場合がある（畚民を参照）。

さらにヤオ族もミャオ族もともに山に住み、焼畑耕作の形で少ししか山地農耕をせず、時には農耕をせずに採集狩猟生活を送る点でも共通している。ミャオ族はヤオ族と同様に交叉イトコ婚を行ない、時には犬供儀も行ない、一般的ではないが犬祖神話がある。ミャオ族は高床住居をもたない時は、ヤオ族の炬つき家屋をもっているらしい。最後に、ミャオ族は角状結髪をしているが、これはヤオ族の複雑な結髪——しばしば髪の中に棒を編み込む——と比較されなくてはならない。

c. 南チベット（烏蛮）文化。第1は、ミャオ族はロロ（彝）族のようだと何度も言われる。それから彼らはしばしばフェルトを用い、しばしば脚絆をつける。さらにミャオ族は山の上に居住するのを好む点で烏蛮と同じである。若干のミャオ族は真の牧畜民として記述され、他のミャオ族については馬飼育と羊飼育が報ぜられている。多くのミャオ族は烏蛮のように死体を巻くだけで、棺には入れない。

d. リャオ文化。少なくともいくつかのミャオ族はリャオ族と関係をもっている。ことにクワヴァードがそれを示す要素である。ことによるとまた他の要素があるかもしれない。

ミャオ族の居住地域は、ヤオ族、リャオ族、烏蛮、チワン族の居住空間の中にある。これだけ見ても、ミャオ族がすべての方向から影響を受けたことが判る。問題は、後に何回も重層された元来のミャオ文化というものがあったかどうかである。エーバーハルトは、彼が見ることのできる限りでは、このようなものはないという。

現在のミャオ族の居住地域は、かつてはいわゆる番が住んでいた。番は彼が西方辺境諸民族中の一民族群として設定した群であって、後で紹介しよう。番という名称がなくなった瞬間に、同じ民族がミャオという名になった。ミャオ族の西の部分は、東の部分が蛮と呼ばれたのと同じくらい確かに番と呼ばれたのである。番文化は混合文化で、チベットの要素が優越している。このチベットの要素はミャオ文化にも現われる。もしも個々のミャオ諸族について十分な資料があれば、いくつかの種族では、昔の番と同様に多くのチベットの要素を認めることができると、エーバーハルトは確信している。他のミャオ諸族のところでは、タイ要素やヤオ要素が多いだろう。最後に、巴文化の名残りも見られることが期待できる [EBERHARD 1942a: 271-273]。

g. 巴諸民族

エーバーハルトは巴諸民族として、江夏蛮、閩中夷、廩君、沔中蛮、巴、巴建蛮、

板楯蛮、岩渠、賓、潞山、巫蛮の11を挙げる。これらはすべて古代の巴国の領域に住み、中国人によって互いに親縁関係があると見なされたものである。ただ巴と板楯蛮についてだけ比較的詳細が判っているだけだが、それも神話についてで、物質文化についての報告はない（これは誤り。後を見よ——大林）。中国高文化に早く溶けこんでしまったために、物質文化はもう残らず、神話だけが残ったのである [EBERHARD 1942a: 300-305]。

エーバーハルトは古文書の資料だけでは巴文化の再構成は不足だとして、『地方文化』に出す資料も利用して、次のような仮説を提出した。巴は一つの別個の群をなしているが、統一的な起源ではない。彼らの主な部分はヤオ群に由来する。したがって板楯蛮と槃瓠蛮についての報告が入り混っている。またヤオ族の最古の居住地も古代巴族の近くだった。この上を一つの羌要素が重層した。東羌族への関係はしばしば強調され、巴と蜀の文化の類似は強調されていたし、実際存在していた。おまけに、チワン文化とことによるとリャオ文化の要素が加わった。

このすべてを材料として、貴族組織に反映しているような重層過程を通じて、周囲の諸文化よりも高度の文化が発達し、これが隣接諸文化に、ことに番文化とヤオ族に著しく影響を与えた。この文化は大変早く、おそくとも前2千年紀には形成されていたらしい。というのはそれぞれが前2千年紀末には形成中の中国高文化にすでに影響を与えたからである。この巴文化は南方の最高の文化である [EBERHARD 1942a: 306]。

そしてエーバーハルトは他の民族群と異なって巴諸民族は特徴的な文化要素の一覧を試みていない。ただ文化の構成要素中で虎神話や人身供犠、洞窟出現神話、黒や赤のような特定の色と民族との結びつきに触れている程度である [EBERHARD 1942a: 305-306]。

h. 白蛮諸民族

エーバーハルトは白蛮諸民族として次の44種族を挙げた。阿樊、棘夷、繻、茜齒、建伶、金齒、清蛉蛮、情普通、靡莫、黒樊囊、西囊、休臘、猓黒、姑復夷、孔苔、喇五（烏）、連然、馬喇、民家、弄棟蛮、白兒子、擺夷、白夷、白人、比苴、樊、白蛮、濮、僕解、蒲人、獈喇（蒲刺）、蒲羅、普勒、獈蛮（蒲蛮）、普麼、普特、水擺夷、地羊鬼、滇、丁苴、董蛮、尾濮、野蒲、葉榆である [EBERHARD 1942a: 306-322]。

これら44種族は雲南に住み、中国人によって雲南の2大種族群の一つとして、また烏蛮に対立する群として認められていたものである [EBERHARD 1942a: 322]。

エーバーハルトは、白蛮において広西のチワン文化と極めて近い親縁関係にある一つのタイ文化を認めなくてはならない、と言っている。本来のチワン文化からはある種の逸脱があるが、それは一部は烏蛮によって重層され、あるいはオーストロアジア語族と接触したことで説明できる。他方では、地理的環境が違うということも一役を演じており、最後にチワン族の文化もそれ自身決して全く純粋なわけではなく、白蛮が受容しなかったような要素も含んでいるからだ。白蛮文化は明瞭に唐代まで、不明瞭にならば漢代や漢代以前にまで遡ることができる。それは雲南とその辺境諸地域に局限されている。

白蛮文化の特徴は次のとおりである。

経済形態——農耕、おそらく水稻耕作。純粋な河谷居民。山は避ける。

社会組織——父権で一部は大変はっきりしているが、一般的には弱まっている。結婚は自由で、大部分は豊稷祭の時に行なわれる。女性は結婚前には大きな性的自由をもつ。時には労役婚もある。ブランコを伴う春の祭。水を掛けるのが婚約のしるしである。

宗 教——呪的信仰、動物変身の信仰、蠱毒。

死者祭祀——棺を埋め、しばしば棺を放棄する。火葬は元来のものではない。

物質文化——高床家屋（欄）。^{イカト} 絣 染め。桶型スカート、樹皮や花でつくった布。ターバン、頭髮中に羽毛を挿す。髻。文身。新生児を洗う。水を好む。武器としては弩、刀剣と槍 [EBERHARD 1942a: 326]。

i. 蜑諸民族

エーバーハルトは蜑（蛋）諸民族として裸本、盧亭、馬人、蜑家を挙げたが、そのうち裸本は盧亭と同じだから3種族だけである [EBERHARD 1942a: 326-330]。

この資料から判断できる限りでは、蜑はオーストロネシア語族であるらしい。つまり古いオーストロネシア語族と同様に、一部は陸上で竹加工者として、一部は水上で海洋民族として別々に生活しているオーストロネシア語族である。注目すべきことは、彼らは本来の大洋航海民ではなく、資料から読みとれるように、河川航行から大洋航海へ至ったのである。

この文化の特徴は次のとおりである。

経済形態——農耕をしない船上住民、あるいは山中での竹編み民。

社会組織と死者祭祀——何も知られていない。

宗 教——蛇祭祀。

物質文化——捕魚，真珠採り，鬘，耳環，腕環 [EBERHARD 1942a: 331]。

j. 越諸民族

エーバーハルトは越諸民族として次の17を挙げた。楚，且甌，夷州，夷越，琉球，駱越，閩，南粵，甌，甌駱，番禺，山越，亶洲，吳，揚越，越，越裳である [EBERHARD 1942a: 331-341]。この中に楚も入っていること，また琉球や亶洲も含まれていることに注意しておこう。

これら17民族は一部は中国人によって越諸民族としてまとめられたものであり，一部はこれら越諸民族の近くに住み，これらとおそらく結びつきがあったに違いない諸民族である。これらはみな古代の民族で前6世紀から漢代に至っている。漢代末をもって厳密な民族名としての越は消滅し，なお散発的に地理的名称として現われるだけである。これら資料によれば，越諸民族は山東沿岸から江蘇，安徽，江西，浙江，福建，湖南をへて，広東，広西まで，それどころかトンキン（ベトナムの北部），貴州の境まで住んでいたに違いない。このように広大な地域の住民は消滅したわけではなく，これといった大移動も報告されていない。北部の越系住民，つまり山東，江蘇，安徽の越系住民は非常に早く漢化してしまった。漢代以後にかつての越領域に現われる異民族は何らかの形で越と関係があるに違いない [EBERHARD 1942a: 342]。

彼によれば越の文化は単一的でない。もっともそれは南方における最高の文化の一つだが。西湖南の山地という原郷から東方の平野に拡大したヤオ族を根幹として，そこで河谷居住から平野居住に移行せざるをえなかった元来河谷住民の獮（チワン）族と出会った。こうして生じた混合過程から越文化が発生した。上述のようにエーバーハルトはヤオ族と蠻民を基本的にはオーストロネシア語族だが，ただ特殊化の仕方が違うだけだと考えている。同様に越人のところでもオーストロネシア語族の二つの特殊型が見出される。つまり，山地住民と水上住民の存在が示唆されているのだ。そこでエーバーハルトは越人を一種のオーストロネシア語族だが，タイ族の要素が加わったものと解釈した。このタイ族の要素は所によって強度がさまざまなのである。だから越文化はかくもさまざまな外観を呈するのだ。エーバーハルトは広東や広西で越と呼ばれている人々を，大きな保留つきで越と呼びたいという。と言うのは彼らの文化について報告されているものは，大部分越文化ではなくて，タイ文化かヤオ文化だからである。

エーバーハルトは越文化の内容を次のようにまとめている。

経済形態——予め田を焼く水田耕作（火耕水耨）。牛は重要だが，馬はない。

社会組織——国家形成の端緒。

宗 教——蛇崇拜はあるが、死者祭祀は何ら知られていない。

物質文化——太鼓として用いられる臼，良い刀剣と，そもそも優秀な金属文化，鉄と銅，ベテルを噛み，文身，鼻飲，水を好む，航海者，蠱毒，ポンチョ式衣服（貫頭衣）[EBERHARD 1942a: 346]。

k. その他諸民族

エーバーハルトは，その他の南方諸民族として次の60民族を挙げた。安化蛮，占城，蟾夷，長沙蛮，真臘，軫沐，交趾，金頼蛮，究不事人，朱崖，穿胃，充州蛮，種女，扶南，符奴，撫水蛮，倭，獠人，合浦蛮，西原蛮，獠，黄支，宜州蛮，羿子，日南，葛蛮，広原蛮，鬼奴，獠人，狼，浪，林邑，猓，零陵蛮，流鱗，六額子，六洞夷人，羅漢苗，羅訥，雒民，蛮人，南江蛮，白額子，山夷，狙，儋耳，噍人，雕題，自深，土人，文狼人，烏滸蛮，武岡蛮，猓，佯獠苗，晏州夷，炎人，豫部蛮，月烏，庸である[EBERHARD 1942a: 346-366]。これら諸族は次の3類に分れる。

1. 資料が充分でないもの——安化蛮，蟾夷，長沙蛮，金頼蛮，究不事人，充州蛮，符奴，倭，獠人，合浦蛮，宜州蛮，日南，零陵蛮，流鱗，羅訥，雒民，山夷，雕題，自深，文狼人，武岡蛮，晏州夷，豫部蛮，月烏。

2. どの民族群に属するのか確かでないもの——軫沐，朱崖，穿胃，種女，撫水蛮，西原蛮，獠，黄支，羿子，葛蛮，広原蛮，鬼奴，獠人，狼，浪，猓，六額子，六洞夷人，羅漢苗，蛮人，南江蛮，白額子，狙，儋耳，噍人，土人，烏滸蛮，猓，佯獠苗，炎人，庸。

3. この本で取り扱う地理的範囲の外の民族であるが，比較資料として挙げたもの——占城，真臘，交趾，扶南，林邑[EBERHARD 1942a: 367-370]。

1. 南方辺境諸民族の構成

以上がエーバーハルトが南方辺境諸民族を構成するとして挙げた11小群である。しかしこれらの大部分は大きく見れば2群にまとまる。

第一の群はタイ系民族であるチワン諸民族を含んでいる。河谷居住者で水田で稲をつくり，ゆるやかな父権的組織をもつが多く，母権的混入要素を含む。この文化の中心は広西だったらしい。しかし，この文化は広東全域に侵入し，福建，浙江，江蘇，江西，湖南，貴州，四川と雲南の諸省にも認められる。これを越えてさらにインドシナに拡がっている。

この文化はどこにおいても純粹に保たれて来たわけではない。たとえば雲南ではさまざまな接触の結果、白蛮文化が特別の文化として形成された。東方では、ヤオ文化要素と混合して越文化の形成が行なわれた。貴州や四川における局地的な諸文化において、タイ文化はかなり変貌した。

第二の群としてはヤオ諸民族と蠻族があり、エーバーハルトはどちらも古オーストロネシア語族と見なしている。彼らは山で焼畑耕作を営み、犬祖神話をもっている。彼らのうち別の一部は水上で特殊化して船上生活民になった。

古代においては越諸民族が文化的にみるとオーストロネシア語族中、最高の部分であった。越文化はヤオ文化にチワン文化が著しく混入してできたものである。越の崩壊とともに、あるいは、そのインドシナ（安南とトンキンつまりベトナム）への移動とともに、あるいは中国高文化中に解消してしまうとともに、高い水準にあった越文化から退行したものが再び今のヤオ族と蠻民として現われたのである。

さらに南方諸民族の中には、オーストロアジア系のリャオ族がある。しかし彼らは純粹の形では残っておらず、大部分はチワン族、あるいはヤオ族に大幅に同化してしまったらしい。

そのほか、巴、ケラオ、ミャオ、リャオにかなり強力なチベット文化の影響が及び、これらの文化の本来の形を変えた。

華南においては民族間関係は、中国北部や西部と比べてはるかに複雑である。したがって、華南においては中国人自身による民族分類も北や西に比べて不確実である。

オーストロアジア語族、オーストロネシア語族、タイ語族が基本的には相互に親縁であるとすれば、この3語族が分れたのは、今日の華南の地においてであったろう [EBERHARD 1942a: 371-372]。

ヤオ文化は湖南、湖北の地で形成され、タイ文化はむしろ広東、広西の平野で形成されたものらしく、中国東部の越文化の地は、これら二つの文化の二次的な拡大地域つまり植民地域なのである。

全体として混合群なのはミャオ族もそうである。番族の子孫がヤオ族化し、それがリャオやタイによって影響を受け、最後にさらにチベット族によって重層されて出来たものである。しかしこの過程がいつ行なわれたか明らかでない。けれども最後のチベット人による重層は早ければ前2千年紀初頭、遅ければ8世紀、つまり唐代に烏蛮が活躍したことと関係づけられるかも知れない。

巴もチベット化したオーストロネシア語族である。この過程がいつ始まったか明らかでないが、前3世紀よりも前である。巴文化は優越性をもつようになり、それとと

もに他の近隣諸文化に対して衝撃力を行使した。巴文化の形成とその近隣諸文化への作用は、北方における中国高文化形成の過程に比すべきものがある。

これよりも重要性が少し劣るのは越文化であって、相違点といえば、中国高文化の進出のため、巴文化形成におけるように過程をもはや終りまでやりとげられなかったことである。

リ族はタイ族によって著しく重層されたヤオ族で、ケラオ族はタイ族が重層したリャオ族であるらしい。

エーバーハルトは次のように想像した。原チベット人は四川に住み、その東隣りに原オーストロネシア語族、それに並んで東南に原タイ語族と原オーストロアジア語族が住んでいた。この原郷から、一つの流れは西と西北に、他の流れはゆっくりといくつもの波をなして南と東に進んだのである。

そして中国高文化は、これら辺境諸文化が重層することによって発生したのであった [EBERHARD 1942a: 417-422]。

3. 西方辺境の二つの民族群

南方辺境諸民族についてのエーバーハルトの説を理解するためには、彼が南方辺境諸民族としてまとめた民族を見るだけでは不十分である。それ以外に彼が西方辺境諸民族としてまとめたチベット＝ビルマ語系諸民族の一部も参照しなくてはならない。それはチベット＝ビルマ系諸民族の一部は西南中国、ことに雲南省や四川省に広く分布しているからであり、また南方辺境諸民族のうち、上述のように巴諸民族やミャオ諸民族などには、彼の考えではチベット＝ビルマ系民族からの影響が大きかったというからである。

エーバーハルトは西方辺境諸民族を、(g) 羌諸種族、(h) 西チベット族、(i) 烏蛮諸民族、(j) 番諸民族、(k) その他の西南諸民族に分けたが、ここで問題にしたいのは、烏蛮諸民族と番諸民族である。

a. 番諸民族

エーバーハルトが《番群》として挙げたのは、次の32民族である。張番、程番、計利、騰番、方番、黒帳房生番、西趙、洗馬姑、西南番、小龍番、謝番、謝蛮、流求、羅計、羅番、羅星、羅典、羅坐、盧番、木瓜、巴猪、八番苗、巴翠、石番、蘇綺、大龍番、多嶺、東謝、萬寿、王番、韋番、夜回である [EBERHARD 1942a: 129-136]。

これら番は、すべて今日の貴州省と、広西の北西部に住み、報告はほとんど宋代に限られている。エーバーハルトの考えでは、宋代以前にはこれら諸族の居住地に、漢族がまだ侵入していなかったからである。つまり、中国人の植民化の線は、この地域を迂回したのである。この植民地化の線の一つは襄陽（湖北）から漢口をへて長沙（湖南）へ通じ、そこから二つに分れ、一つは直接南下して広州へ行き、もう一つは桂林（広西）をへて梧州へ行き、そこから水路を広東に行く。この場合、この地域を西におくことになる。

別の植民化の線は、成都（四川）から越嶲^{てい}（四川省西南部）をへて雲南府（昆明）に行き、そこから西に騰越に、さらにインドに行く線で、これはこの地域を東におくことになる。

後世重要になる植民化の横断線、つまり、漢口から重慶をへて成都に行く線や、また別に梧州（広西）から南寧をへて河を遡って雲南府に至る道も、同様にこの地域を横断しない。宋代になって初めてゆっくりと進入が始まり、今日もまだ完結していない。だから宋代以前に報告が少ないのである。

宋代以後にこの地域の番についての報告がなくなるのはことに明代になって苗族として現われるからである。

残念ながら、番についてのすべての記述は大変簡単で、良くない。名前しか報じてないのが大部分で、それは祥柯と夜郎の記述のすぐあとに記されている。この両民族はエーバーハルトによると烏蛮系である。番の一つの羅典は別のところで彝（ロロ）種族と呼ばれ、烏蛮に数えられる。それやこれを考え合せると、番は烏蛮と親縁で、ともに広義のチベット系諸民族に属する [EBERHARD 1942a: 137-138]。

番の文化を考えるに当り、黒張房生番は、近代の報告しかなく、居住地域も違い、文化も羌族と一致しており、番の議論から除外しなくてはならない。

それでは番の文化として、どのようなことが言えるかというと、山地居住（西趙）、熊の毛皮の縁なし帽子と、長靴、ウールの衣服、脚絆、焼畑（東謝）で、これらの要素は烏蛮と共通する。

その他の点では南方諸民族との関連がもっと強く出ている。つまり氏族組織、椎髪、斑布（西南番）、夫婦別居（羅坐）、少女が農耕、木臼、規則的な市、春の祭り（八番苗）、樹上（高床）居住と銅鼓（東謝）であって、同様な像をミャオ族のところでも見ることができる [EBERHARD 1942a: 137-138]。

エーバーハルトは、番の文化は一方では羌文化、他方では南方諸文化と関係をもつ点において、一種の重層によって出来た群と考え、この番文化の地域の東部四川は古

代に巴文化が発生したことを指摘している [EBERHARD 1942a: 174]。

b. 烏蛮諸民族

エーバーハルトは烏蛮諸民族として、次の96民族（重複かと思われるものも含む）を挙げた。戛昌（阿昌），阿者羅羅，阿蝸，阿鈎，阿都，阿烏猓羅，-長禪蛮，庶步，撒彌（Ché'-mi），車蘇，撒完，強宗，九道，屈都，海西子，海猓羅，黒羅羅，黒爨，步麼徒，析怒，休制，雪松村人，乾夷，猓猓，猓羅，哥羅，猓獐，果惹，古宗，苦惹，浪穹，老烏，力步（獐獐），羅（羅部），猓猓，羅伽，羅鬼，落蘭，羅羅，猓落，羅蒙，羅甸，羅婺，獐獐，獐芒，魯兀，蒙詔，蒙析，蒙舍，蒙嶺，彌鹿（彌勒），妙猓羅，麼察（木察），磨些，磨彌，磨沙，猓獐（猓鷄），南詔，女官，怒子，巴苴，巴凡兀姑，白脚猓羅，白衣，白猓羅，白羅羅，閩畔，步雄，撒彌（Sa-mi），洒泥，沙麻，沙窩，山蘇，施浪，施蛮，大頭猓羅，特磨，澄睽，頭目，牂柯，自杞，刺毛，爨，徒莫祇，東爨，娑諾竜，烏撒，烏蛮，烏蒙，烏麼蛮，烏白蛮，烏孫泥阻，烏爨，夜郎，于矢，越嶲である [EBERHARD 1942a: 97-122]。

これら烏蛮諸民族は中国人の分類にもとづいてまとめられた。その分布は今日の雲南省であって、この省の外には少ししか出ていない（四川省南部，貴州省東部，広西省東部，ベトナム，ミャンマー，シャンステーツ） [EBERHARD 1942a: 123]。

これら烏蛮諸民族は西洋の学者がチベット＝ビルマ諸民族と名づけているものである。チベット＝ビルマ語族の中でも本来のチベット人（エーバーハルトの g 群と h 群）と親縁の一群である。烏蛮はチベット人に文化的に似ている。

烏蛮諸民族は焼畑耕作あるいは純粹の牧畜を行ない、山地のかなり高いところに住む。この群の諸民族は漢代以来知られているが、より正確な報告は唐代以後になってはじめて伝えられるようになった。エーバーハルトが取り扱った資料は近代への境まで達している。そうやってはじめて十分な材料を見つけることができたのであった。

烏蛮文化の特徴は次のとおりである。

経済形態——焼畑耕作，單純な穀物の栽培。あまり高度の高いところや北部においては、羊と馬の飼育。それにヤクの飼育も行なわれる。これと並んで狩猟や漁撈も行なわれる。これら諸民族のより古い経済形態は遊牧だった可能性がある。

社会組織——女性の重要性が目を惹く。ことによると元来母権的だったことを示唆しているのかも知れない。確固たる種族組織やクラン組織は欠如し、また首長制も欠けている。ただ著しく重層した民族地域（たとえば黒

ロロ族地域)においてのみ社会的成層が現れる。交叉イトコ婚は稀である。

宗教——著しい呪術信仰が目を惹くが、その本来の性格は報ぜられていない。天への供儀が時々報告されている。6月24日に火把節があるが、おそらく年の半ばの祭りである。

死者祭祀——死者をくるみ、火葬する。

物質文化——材木や板で作った小屋、時にはこけら葺きの屋根。家屋の形はおそらく方形。屋内には寝台はないらしい。衣服はフェルトや羊毛製で、帯がついている。革靴、脚絆、ターバン。何本かの編み毛がある。髭はおそらく大部分抜き取られる。耳環。肌色は濃い。毛皮をマントとして着ることがある。しばしばミルク、バター、バター茶を摂る。植物の茎から占う。武器としては弩、楯、胄、弓、刀剣 [EBERHARD 1942a: 128-129]。

エーバーハルトが指摘するように、全体としてこの群はチベット=ビルマ語族のロロ(彝)諸族である。羌文化と共通性もあるが、異なるところもあるのはオーストロアジア系住民の上に重層したからで、形質的にもその結果、肌が黒くなったのである [EBERHARD 1942a: 174]。

4. 諸地方文化との比較

エーバーハルトは1942年に『辺境諸民族』ばかりでなく『古代中国における地方文化』も刊行した。アンカラに住み、かつ大戦が進行中という状況のもとで、北と西の諸地方文化を論じた上巻はライデンで、南と東の諸地方文化を取り扱った下巻は北京で刊行された。『辺境諸民族』が辺境諸民族についての資料を整理し、分類したものであるのに対し、『地方文化』は主として漢民族自身の民俗、伝承についての記録の中から、中国高文化の誕生に寄与したと思われる地域的な文化複合をいくつか摘出したものである。この二種の作品は互いに他を前提としている。つまり諸地方文化が、タイ文化とかヤオ文化という名をもって命名されたのは、まさに『辺境諸民族』において、それら民族群の文化複合が再構成されていたのを手がかりにできたからであり、他方、『辺境諸民族』のいくつかの民族群は、文化内容についての記録が貧弱なため、文化複合を再構成するためには、『地方文化』の結果に依存しているからである。

これから『地方文化』の中から、本稿の範囲に関する文化について『辺境諸民族』

の結果と簡単な比較を試みることにしたい。彼が基本的な文化複合と考えたヤオ文化、チワン（タイ）文化、リャオ文化をまず取り上げ、次に彼が二次的な文化複合と考えた越文化と巴文化とを取り上げることにする。

エーバーハルトは『地方文化』下巻でヤオ文化を論じ、系列39から51までの13系列を設定した。それら系列とは、3月3日の祭、犬祖神話、猿と山の精、火の神々、鶴、禹の踊り、弓の射手、月の女たち、焼畑農耕、料理容器、山上の墓、妻貸し、恋歌（歌垣）、伝染である [EBERHARD 1942c: 5-131]。

これら諸特徴のかなりのものは『辺境諸民族』でも挙げられている。つまり犬祖神話、焼畑農耕、恋歌（歌垣）などである。しかし、いずれか片方にしか出てこない特徴も少なくない。『辺境諸民族』では親族集団や家屋についていろいろ特徴が挙げられているが『地方文化』ではあまり取り上げられていない。反対に『地方文化』では、犬祖神話以外にもいろいろな神話伝説が論ぜられている。

次にタイ文化にうつろう。これは『辺境諸民族』のチワン文化に対応するものである。『地方文化』では系列52から70までの19系列が論ぜられている。つまり恋愛呪術（蠱を含む）、人身供犠、牛供犠、三足の亀、蛙、稻、神農、九竜、農耕供犠、雷神、象、樹皮布、女たち、ベテルの実、文字を書く精霊たち、男子結社、仮面行列、死者である [EBERHARD 1942c: 132-363]。

これら諸民族のうち水稻耕作や蠱はチワン文化においても挙げられているものの、他はほとんど挙げられていない。それらは『地方文化』において新たに論じられたものである。他方、親族組織や物質文化においてはチワン諸民族の文化に独自の項目がある。ここで注目すべきことは、『辺境諸民族』ではチワン諸民族以外にリ諸民族の文化にも、『地方文化』のタイ文化に対応するものがいくつか含まれていることである。たとえば若者宿、牛供犠、蠱呪術である。

『地方文化』のリャオ文化は系列80と81の2系列だけであって、宇宙卵神話と首符（頭蓋崇拜を含む）が論ぜられている [EBERHARD 1942c: 467-488]。『辺境諸民族』のリャオ諸民族にも頭蓋崇拜が挙げられているが、宇宙卵神話は特徴として出ていない。反対に『辺境諸民族』では、経済、社会、宗教、物質文化にわたる一連の要素が挙げられている。

『地方文化』の越文化は系列71から79までの9系列を含んでいる。つまり防風神、銅鼓、鉄、蛇崇拜、竜舟競争、図像呪術、骨なし王、鐘、鶏である [EBERHARD 1942c: 364-466]。『辺境諸民族』の越諸民族の文化にも蛇崇拜、鉄、金属技術は挙げられているが、神話、儀礼は出ていない。しかし『辺境諸民族』は、一般的民族誌的な

項目の挙げ方をしている。

最後に巴文化を見よう。これは『地方文化』上巻で、系列29から38までの10系列が論じられている。つまり楚辞、蜀王Ⅰ、蜀王Ⅱ、惡神張、虎、禹の妃、漆、蜀の巨石人、李冰と水、竹王である [EBERHARD 1942b: 321-391]。これに対して『辺境諸民族』の巴諸民族では、文化複合の再構成ができずにいたが、それでも虎神話や洞窟出現神話（いずれも『地方文化』では系列《虎》）に言及していた。しかし『地方文化』のほうがはるかに豊かな内容をもっていることは言うまでもない。

以上の簡単な比較からも明かなように、『辺境諸民族』でまとめられた各民族群の文化内容と、それに対応する『地方文化』の地方文化の諸系列とは、一部一致はあるもののかなりの出入がある。これは一つには『辺境諸民族』は、一般的・民族誌的なまとめ方をしたのに対し、『地方文化』はむしろ興味深い項目を取り上げ、それぞれに意味的あるいは機能的に関連するさまざまな伝承などを一系列として論ずるやり方を取った結果でもある。また第二に、資料の面からも、一方は辺境諸民族についての記録と、他方は漢民族の地方伝承の記録という相違がある。

このようにして、『辺境諸民族』と『地方文化』は、互いに補い合う性格の二組の著書である。両者を比較して利用することは、中国民族史、文化史の研究上、有益な方法であろう。

5. エーバーハルト説の問題点

a. 一般的評価と批判

以上、私はエーバーハルトが中国南部の民族として挙げた南方辺境諸民族の11小群と、西方辺境諸民族の2小群を紹介した。また、それらの群の文化と、彼が『地方文化』で論じた文化複合との比較も試みた。これから彼の説について検討を試みることにしたい。

エーバーハルトの『辺境諸民族』は、歴大な数の民族についての資料を集め、整理し、分類した。それだけでも大きな業績であった。しかし、エーバーハルトの研究が林惠祥 [1936] やその他の研究者の試みと違っているのは、それぞれの民族群に特徴的な文化要素を摘出して、それぞれの民族群に一つの文化複合を想定したことである。そしてその場合、当時ドイツ語圏の民族学で影響の強かった文化圏説の仮説などによりかかるような安易な道を選ばず、中国の資料自体から考えたのであった³⁾。またこ

のような文化内容の分析や比較を通して、それぞれの民族群の形成の過程を推測したことである。したがって、歴史民族学的な関心がエーバーハルトの試みを貫いており、その意味で本書は東アジアの歴史民族学の古典としての地位を保っているのである。

次に彼の分類や再構成した文化内容に移ろう。

彼の分類はいろいろな意味で示唆に富んでおり、当時の、あるいは一部の後の中国学者に比べてもすぐれている点がある。

たとえば、エーバーハルトが南方辺境諸民族の中に越諸民族を1小群として入れたことは、今日から見れば当然ではあるが、当時にしてみれば卓見であった。たとえば、林惠祥の『中国民族史』では、荆呉系と百越系は、それぞれ華夏系や東夷系と並ぶ漢族来源の3、4として取り扱われ、中国南部や西南部の諸民族、つまり苗瑶系、ロロ・ビルマ系、僈僇系とは切り離して取り扱われていたのである[林 1936]。このため越や荆呉と南方諸民族との間の密接な関係は見失われる結果になったのである。これに反してエーバーハルトは越諸民族を南方辺境諸民族の一部として取り上げたため、示唆に富む越文化論を展開できたのであった。ただ楚のように個性の強い大きな文化で、しかも越との言語などの系統関係もよく判らないものを、エーバーハルトが越文化に含めたのには、私は疑問を感じている。

また、エーバーハルトは巴諸民族を南方辺境諸民族の中に位置づけた。巴諸民族はふつう氐羌の西南の群として取り扱われているものであって[たとえば、林 1936: 第12章; 劉 1969: 120-122]、これを西方辺境諸民族の枠内でなくて、南方辺境諸民族の一群として取り上げたのは一つの見識と言ってよい。しかし、その出来栄はあまり感心しない。物質文化についての資料がないと言っているが、『後漢書』巻116によれば、板楯蛮は白竹の弩をもっていたし、またその名称から見ても板楯をもっていた。また南部蛮つまり麋君蛮も妖虫を射殺したというから弓か弩をもっていたに相違ない。また布や鶏羽を貢していたことから見て、布を織っていたに違いない。エーバーハルトの巴文化の再構成はほかの民族群ほどうまくいっていなかったのである。

次に彼の分類や再構成した文化内容に移ろう。

全体としてのエーバーハルトの大きな功績にも拘らず、細かく見れば欠点もあり、批判すべきところや不満な点、賛成できない点もいろいろある。

まず大きな民族群は、大綱において首肯できるものではあるが、2、3問題な点が

3) そこにはもちろん文化圏説の批判者たる師匠のリヒアルト・トゥルンヴァルトの影響がある(トゥルンヴァルトの文化圏説批判については、Thurnwald [1931: 10-19] を参照)。

ある。たとえば、エーバーハルトは中国西南部のオーストロアジア（モン＝クメール）語族にしかるべき注意を払っていない。たとえば、ワ族は西方辺境諸民族の中の「その他の西南諸民族」の一つ（K11）として取り扱われていて、ワ族をはじめとする雲南のオーストロアジア語系諸民族を一つの小群にまとめることをしていない。このように本物のオーストロアジア語族をきちんと取り扱わないにおいて、リャオ諸族をオーストロアジア系かと考えているのは、いかにも適切を欠くやり方である。そしてリャオ諸族はおそらくカダイ語族かと思われ、オーストロアジア語族であった蓋然性は大きくないように見えるのである。

また烏蛮と白蛮の取り上げ方にも問題があるが、これはあとで論ずることにしよう。

次は文化複合の設定について一言したい。エーバーハルトが南方辺境諸民族を11の小群に分けつつも、大部分は文化的にはチワンとヤオの2大系列にまとまり、その他にリャオ系の文化があると考えた。これは華南の伝統的文化には、ヤオ文化によって代表される山地の焼畑耕作民文化と、チワン文化によって代表される低地の水稻耕作文化という二つの系列があり、焼畑耕作文化としてはさらにヤオ文化よりも古いリャオ文化があるという構想である。

リャオ文化の問題は一応別にすれば、華南に焼畑耕作文化と水稻耕作文化という二つの異なる文化的伝統があったという考えは、その後の研究者も大なり小なり採用している考えである。この構想の古典的な定式化がエーバーハルト説だったのである⁴⁾。

これはたしかに彼の大きな功績であった。しかし、そこには不満がないわけではない。

エーバーハルトの研究で物足りないのは、同一民族、あるいは民族群の文化が歴史的に変化していったこと、ことに漢族文化との接触を通じて変化していったことの追求が不十分なことである。たとえばエーバーハルトが民族群の分類、文化複合の再構成にあたって重要視した経済形態にしても、佐竹靖彦の説によれば、宋代の四川省南部の少数民族は焼畑耕作から定畑・水田耕作への過渡期にあった。そして同様な過程は同時期の中国西南部の少数民族のところで共通して見られ、いわゆる《漢化》と多くの場合、密接に結びついていたという[佐竹 1968: 44]。

このような歴史的変化、漢族文化からの影響や、あとでふれる漢族との接触を通じ

4) エーバーハルトが中国文明形成論についてはじめてその構想を1936年のドイツ民族学会で発表した時、後の論著におけるタイ文化（チワン文化）や越文化に当る文化複合はすでに出されていたが、ヤオ文化はまだ出ていなかった[Eberhard 1937b, 1938]。しかし、その少しあとに書かれたと思われる論文[Eberhard 1937c, 紹介は本稿483-485]では、畚族や墮民の問題が詳しく論ぜられている。おそらくこのころからヤオ文化の構想が生れ、だんだん形を整えていったのであろう。

てのアイデンティティの確立 [竹村 1994] といった要因を考慮して、エーバーハルトの体系は考え直さなければならない。しかしその場合も、彼が提供している資料と示唆は、貴重な基礎なのである。

しかし、資料の面に関しては、本書は批判すべき点をもっている。つまり、本書は必ずしも基本的な一次資料を精読してまとめられたとは言えず、二次的な編纂物からの孫引きがかなり多く、また読み方も常に精密とは言えないことである。

一例として、リャオ諸民族の最初の2民族の資料を見よう。飛頭獠については、顧炎武の『天下郡国利病書』、『酉陽雜俎』、『玉芝堂談薈』から『新論』、『赤雅』によって『粵西叢載』、『太平広記』を資料としているが、第2の獠族については、『太平御覧』から『魏書』と『北史』を孫引きし、胡璞安の『中華全国風俗志』から『隋書』地理志を孫引きしている場合すらある。そのほか鄭樵の『通志』や『嘉慶重修大清一統志』が用いられている。

この例やその他の例から推して、エーバーハルトが編纂物をしばしば利用したのは、佚文が引かれているためであるとか、現行本の誤りを正すためという内容上の理由によるよりもむしろ、便宜上の理由によるものであったように思われる。彼の立場は、恕すべき二つの理由から理解できる。一つは、ナチスに反対という政治的な理由によって、不安定な生活を送っており、できるうちに、仕事を早くまとめたという焦りから、原典に当らずに、編纂物からの引用で済ませたのであろうことである。もう一つは、彼はこの大著をアンカラでまとめたので、おそらく必要な文献参看の便に乏しく、主として自分の蔵書とカードに依存せざるを得なかったからでもあろう。

もちろん、これら諸族についての民族誌的記述はしばしば乏しく、また二次的編纂物を通して、ある程度カバーできることは事実である。しかし、エーバーハルトのこのような資料の選択は、資料集としての同書の価値をある程度制限するものと言わなくてはならない。

b. ミャオ＝ヤオ諸民族

最初に取り上げる民族群は彼がミャオ諸民族とヤオ諸民族と呼んだものである。これら民族の起源については、中国の近年の学界では古代の武陵蛮ないし五溪蛮に共通の祖先を認める説が大勢を占めている。

たとえば、『瑤族簡史』 [『瑤族簡史』編写組 1983: 第1章第2節] によると、瑤族の来源についてはまだ定説がない。しかし多数意見で、かつ客観的であるという説によると、彼らの祖先は長沙・武陵蛮あるいは五溪蛮で、原住地は長沙・武陵両郡つま

り湖南省の湘江・資江・沅江地域と洞庭湖沿岸地域である[岡田 1993: 62; なお『中国少数民族』編写組 1981: 510; 竹村 1981を参照]。

また『中国少数民族』編写組による『中国少数民族』の苗族の章[1981: 445]によると、ミャオ族の先祖は秦漢時代に、今でも彼らが比較的集まって住んでいる湘西、黔東の五溪地区に住んでおり、いわゆる五溪蛮や武陵蛮の中に含まれていたが、後に西方に向けて移動し、今日の分布状態となったという。

それとともに、林惠祥[1936: 第14章]以来ミャオとヤオを苗瑤系として一括して取り扱うこともふつうである。しかし、エーバーハルトはヤオ諸民族とミャオ諸民族とを、ミャオ・ヤオ系として一括せずに、別々の小群として取り扱った。これはミャオとヤオとが歴史的にすでに長期間、別々の民族(群)と見られて来たことを考えると当然の取り扱いである。しかし、その一方ではこの両群がことに深い関係にあるとは別に強調していないので、言語上から考えられる元来は同系統だったことが霞んでしまう結果になっている。

とは言え、彼はミャオ文化は基本的に混合文化と考え、その基本的な構成要素としてヤオ文化を想定している。これは一つにはミャオ諸族のほうがヤオ諸族よりも群内部の文化的差異が大きいことによっており、また第二には中国南部諸民族においては、焼畑耕作にもとづく原基的な文化複合を代表しているのがヤオ諸族であるという彼の基本的な考えによるものである。

このような立場と叙述の仕方をとっている以上、エーバーハルトが、ミャオ＝ヤオ語族の元来の文化はどのようなものであったか、という問いを出していないのは当然である。けれども彼の記述の中には、このような問いの一つの答えになりうる個所がある。それはミャオ諸民族の文化中におけるヤオ文化的要素のことである。つまり、ヤオ群とミャオ群の共通文化要素であるから、ミャオ＝ヤオ語族の元来の文化内容をうかがう重要な手がかりになるからである。山地居住、焼畑耕作と採集狩猟、交叉イトコ婚、犬供儀、犬祖神話、炉つき家屋、結髪が、それら要素である。交叉イトコ婚のように問題と思われるものも含まれているが、充分検討に値するリストであると言えよう。

ミャオ＝ヤオ諸族の元来の共通文化内容が何であったにせよ、両民族群は歴史上、主な分布領域を異にし、別々の発展の道を辿った。大ざっぱに言えば、ミャオ諸族の分布の中心は貴州省にあり、ヤオ諸族の分布の中心は、両広山地にあった。この分布地域の相違は両群の文化の相違を考えるのにも重要である。

一つは外からの影響に関してである。たとえば、貴州のミャオ諸族は、西方のチベ

ット＝ビルマ語族に近接しており、したがってチベット＝ビルマ語族の文化的影響を、ヤオ諸族の場合よりも多く受けていても不思議でない。その点、エーバーハルトがミャオ文化の構成要素の一つとして南チベット（烏蛮）文化を挙げたのももっともであり、充分考慮に値する仮説である。

他民族との関係は、たんに文化内容の要素に関して重要なだけではない。民族的アイデンティティを堅持することによって、その文化と社会は独自の個性が与えられてきたのである。ヤオ族は文化的に「漢化」が著しかったにもかかわらず「漢族化」しなかった。竹村卓二は次のように論じている。

「〈家先単〉にせよ道教体系にせよ、漢族体制側が「同化」装置として用意したいわばハードウェアを、ヤオ族側がむしろ〈渡海神話〉や〈掛灯儀礼〉などのソフトウェアの開発によって逆利用し、エスニシティの「境界」維持に成功した結果にはかならない」【竹村 1994: 36】。

民族間関係によって文化内容ばかりでなく、文化の構造の変化も進行したのである。

第二は生態学的条件の相違である。ミャオ族の主な居住地域は西南台地であり、ヤオ族のそれは両広丘陵である。西南台地は華南でもっとも多くの家畜を産するところであった【CRESSEY 1934: 376, 訳 399】。したがってミャオ諸族において牛類飼育と牛類供犠がさかんなことに反し、ヤオ諸族ではそうでないことなどは、少なくとも一部は生態学的条件の相違によるものかも知れない。

またエーバーハルトはヤオ諸民族の一つ（m5）として畚民を取り扱っている【EBERHARD 1942a: 197-199】。同様な考えは中国の学界でもかなりさかんであるが、蔣炳釗が論じているように、畚民の祖先は閩（福建）、粵（広東）、贛（江西）三省の交界に唐宋時代に住んでいた蛮僚であったろうし、さらに遡ればこの地域の山越だったらしい【蔣 1988: 21-108】。言うことは畚族はその先祖以来、南揚子江山地という生態学的領域において発達をとげた民族であって、両広丘陵において発達したヤオ諸族とは相違していることになろう。エーバーハルトのようにミャオ諸民族をヤオ諸民族と区別するならば、畚族もヤオ諸民族の列から外して、独立の一群と認めることが適当であったろうと思われる。

しかし、他民族、他文化との関係にせよ、生態学的条件の相違にせよ、まだ本格的な研究はこれからという段階にあり、ここでは問題の所在の指摘にとどめておきたい。

これからヤオ＝ミャオ群と関連深い三つの民族群について検討を加えたい。それは越と巴と番である。まず越諸民族について。

c. 越とヤオとタイ

エーバーハルトの南方諸民族の中で、越群は重要な地位を占めている。そこで注目されるのは、越文化の根幹にヤオ文化があるという考えである。この考えは彼がフィールドにおいて実感として得たものが基礎になっているので、少し詳しく紹介しよう。

つまり、エーバーハルトが中国の地方文化の構想を形づくるに当って重要だったのは、1934年から35年にかけて、ベルリン民族学博物館の依頼によって行なった中国調査旅行だった。彼は華北と華中からそれぞれ一ヶ所を選んで調査したが、その中でも比較的長期間調査した浙江省金華は、彼に新たな見通しを与えてくれた。

浙江省東部は山地的な特徴のために一種の退避地域をなしており、そこでは当時なお部分的には住民抑圧が存在していた。ここは最初一目見たところでは中国共通の文化的特徴をそなえているが、次に華中に属することに気づき、そのあとで、金華の町とその南の地域は、近隣のかなり広い範囲のどこにもない特色をもっていることが判ってくるのである。

それは第一に、牛と牛とを闘わせる形式の闘牛で、雲南や貴州の非漢族系原住民のところに存在するものである。古い文献には四川からも記録があり、ここも非漢族的性格の強いところだ。同様な分布をもっているのは樹木崇拜、主として楠の木の崇拜であって、父とか母と呼ばれている。所によってはこれらの木のために特別の社殿が建てられ、その中ではもはや樹木自体でなくて、神像がその代表者として崇拜される。この樹木崇拜も華南原住民のものと比較できる。さらに華南のヤオ族のものとそっくりの兄妹始祖型の洪水の話のような一連の民話がある。その他多くの要素からも、浙江省のこの地域の文化構造は華南諸地域のそれと密接な関係があることがうかがわれる。

ところで、この地域にはかなりの数の畬族という非漢民族が住んでおり、ヤオ族と極めて近い関係にある。上記の諸特徴は、畬族がもち込んだように思われる。たとえ彼らにはこれら特徴が失われてしまっているように見えてとしても。現在の畬民は17世紀初頭になってはじめて広東省や福建省からここにやって来た。しかし地方志などから見て13世紀初頭にはすでに畬民がこの地域に住んでいたらしく、17世紀の移動は再来住に過ぎないようだ。17世紀初頭の戦闘で、住民の大部分は死に、多くの中国人と畬民が新たに來住してきたのである。

ところでベルリン民族学博物館所蔵の一枚の絵（I・D・34069）は明代の絵を後に

模写したものであるが⁵⁾、恐らくこの地における闘牛がこの再来住以前にあったことを示している。民話と樹木崇拜が再来住以前にあったことはまだ証明されていないが、多くの女神が崇拜されていたことは証明されており、これも華南を指し示している。したがって、これら特色は今日の畚民とともに始めてやって来たというわけではないのである。

今日の畚民の居住地の少し北、紹興の町の近くに墮民がいる。彼らは乞食のカーストであって、男は乞食をし、女は結婚の仲介や歌手として活躍しているが、固有の文化要素はもうもっていないらしい。史料の上では明代初期から、いつも乞食のカーストとして出てくる。明代の画家徐渭がその『徐文長集』巻18、7-8頁（1911年上海版）で引用した紹興の古い年代記によると、当時彼らはまだ固有の古い衣服や習俗をもっていた。女たちは犬の頭の髪かたちで、男たちは牛の角でランプを作り、牛の彫像を作った。墮民も畚族やヤオ族と親縁の非漢民族の残滓だったのである。彼らにも華南諸民族に特徴的な牛崇拜の一部が見られた。この牛崇拜は、もっとも明瞭な形をとった場合、儀式的牛供犠、闘牛、供犠した牛の角の保存が含まれている。さらに畚民やヤオ族にある犬の縁なし帽子、犬の髪かたちは、犬崇拜や犬祖伝説と関係があるが、これも墮民をヤオ族の一派とするのを一層確実にする。17世紀における現在の畚民の来住以前、少なくとも明代初期以来、おそらくそれ以前から浙江省のこの地域には、ヤオ族と親縁の初期畚民と墮民の存在が証明できるのだ。

唐代やそれ以前の史料には畚民も墮民も出てこないが、この地域には越諸民族が住んでいたことを報じている。すべての畚族は浙江省の会稽山の起源だと言い、越人も会稽山を故郷と考えていた。越人も犬神話をもっていた。また牛崇拜は越人に典型的で、かつて越人の住んでいたところではいたるところに痕跡がある。越人の分布領域は今日の浙江、江蘇、江西、安徽の諸省、それに山東省南部であった。越人の本拠に漢族は、4～5世紀に第一派が入った後、本質的には9世紀になって居住するようになった。当時漢族は主として河谷居住者として古い越系住民の上に重層し、越系住民はこれによって分裂し、多くの部族となって山地に押し込められた。一部は南方に移住した。漢族は民族的にも越人を吸収したように、彼らの習俗の一部も受容した。

越諸族の一部としての畚民は漢族の来住民と相並んで引きつづき居住し、ないしは混合し、他方、畚民の一部は越諸族の一般的南遷に伴って行き広東省にとどまった。そこから途中長期間福建省に滞在した後、17世紀にまた浙江省に入ったが、そこでは

5) ベルリン民族学博物館には、日本のアイヌ絵など、諸民族の風俗を描いた古い絵画を多数所蔵しており、これもその一つである。

その間に古い畚民はほとんど全く絶滅してしまっていた。しかし墮民は隔離と一種のカースト形成によって、再来住することなく今日まで自立してきたが、時代のたつうちに彼ら固有の文化内容を失ってしまったのである [EBERHARD 1937c: 87-91]。

エーバーハルトのこの構想は、充分検討に値するものである。鈴木満男の調査研究 [たとえば鈴木 1994] も、そのことを強く示唆している。エーバーハルトの構想を考える場合に重要なのは、古代の山越の問題である。しかし、山越について、我われはまだ僅かしか知らないのである [大林 1993]。

ただ畚族の早い波がすでに13世紀に浙江省に現われていたというのは疑問の余地であろう。上述のように畚民は基本的には南揚子江山山地南辺の住民の子孫、したがって古代山越の子孫だったと思われる。この南揚子江山地の文化的伝統をうけた住民群が、何回も浙江省東部にも出たり入ったりしたことは充分考えられる可能性である。南揚子江山文化とのかかわりは、越文化の形成期あるいはそれ以前から、山越の時代、畚族の時代と何回も繰り返し行なわれたものと見るのが実際のであろう。

また墮民は『辺境諸民族』ではヤオ諸民族の一つ (m 33) として挙げられている。この大胆な想定も私には極めて魅力的である。

越についてはヤオ諸民族ばかりでなく、タイ諸民族も重要である。エーバーハルト自身、越文化は焼畑耕作のヤオ文化と水稻耕作のタイ文化とが結合して生れたものと考えていた [EBERHARD 1942c]。それと並んで重要なのは、問題の言語学的側面である。古代の越をオーストロネシア語族と見るエーバーハルトの説は疑わしく [崎山 1990参照]、むしろタイあるいはオーストロ=タイ語族と見る蓋然性がある。

ここで面白いのは、雲南民族学院の黄惠焜の説で、彼は《越人文化区》を次の三つに区分した。

第一地区 江蘇，浙江，福建，広東。ここは早くから華夏文化や楚文化の影響を受けて同化過程を歩み漢人化した《同化型地区》である。

第二地区 広西，海南，貴州の諸省とベトナム北部。ここは漢楚文化やその他の文化の影響を受けたけれども漢人にはならなかった。しかし漢文化がかなり深く及んだところで《異化型文化》であり，《過渡型地区》である。

第三地区 雲南省西南部，タイ国中北部，ミャンマー東北部，それにアッサムの一部。漢文化の影響もインド文化の影響も少なく，越人文化をもっともよく保留した。その中でも西双版纳とチェンマイつまりランナ Lanna 地域は標準的なタイ人地域である。

越人文化がもっともよく残ったのは第三地区で，第二地区がそれにつぎ，第一地区

がもっとも少ない。タイ族は越の子孫であるが、第一地区や第二地区から移動してきたのではなくて、第三地区内部で進化してできたものである【黄 1992: 4-5, 348, 356-357】。

ここで黄がタイ族と呼んでいるのは、タイ語族の中でも南方群ないしタイ語群をことに指し、また彼が越人と呼んだものは、広くオーストロ=タイ系諸民族を指しているとしてよい。黄が漢文化や楚文化からの影響の度合いを考慮に入れて越人文化を三地域に分けたのは、オーストロ=タイ系諸民族分類の興味深い試みである。ただ、ここで問題と思われるのは、漢楚文化の影響以外の、文化の地域差の問題、またミャオ=ヤオ語族との関係が充分取り上げられていないところに、今後の課題があるように思われる。

ここでミャオ=ヤオ語の中国南部・東南アジアの諸言語の中における位置づけについてつけ加えておきたい。ミャオ=ヤオ語族はさまざまな他の大語族への帰属ないし関係が取沙汰されてきたにも拘らず、すべての研究者が納得するような説はまだ出されていない。モン=クメール語族に属する、あるいは近いとする説はフォレスト説【FORREST 1948: 89-96】やヤホントフ説【YAHONTOV 1964: 12-13】があり、チベット=ビルマ語族に属すると考えるマスペロ説【MASPÉRO 1952: 529-530】もあれば、オードリクールはミャオ=ヤオ語はオーストロアジア語とチベット=ビルマ語との間の鎖をなしていると論じ【HAUDRICOURT 1966: 56】、傅懋勳は漢=チベット語族中の漢=タイ語群、チベット=ビルマ語群に並ぶ第三の語群としてミャオ=ヤオ語を考えている【傅 1957: 10】。

これと並んでタイ=カダイ語族と関連づける考えもある。たとえば、ハワイ大学のローレンス・リードが1992年に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で行なった講演では、ミャオ=ヤオ語はタイ=カダイ語族の中に入れられている。つまり、タイ=カダイ語族の中には、タイ語群、カム=スイ語群、カダイ語群と並んでミャオ=ヤオ語群も入っている。これら語群はみな声調があり、中国語に似た文法構造をもっており、しばしば系統的に中国語と関係があると考えられて来た。しかし、それらは実際はオーストロネシア諸語と関係があり、タイ語と中国語の共通語彙の多くは、何千年にも及ぶ両言語の接触の結果であることを示す、かなりの証拠がある【REID 1992: 9】。

もちろん問題はまだ決定したわけではない。それでもミャオ=ヤオ語をタイ=カダイ語族の中に位置づけようとする考えが出てきたことは注目に値する。ここで思い出されるのは、ヴィルヘルム・シュミットがミャオ=ヤオ語をタイ語族の一員と考えた

ことである。ただ彼はタイ語族を北、東、東南の三群に分けたが、いささか奇妙なことに、ミャオ語とヤオ語を Khamti, Nora, Tairong, Shan, Aitonia, Ahom とともに北群に入れている [SCHMIDT 1926: 133]。これはたんにミャオ語やヤオ語がタイ諸語の中では北部に分布しているからという単純な理由によるものかも知れない。

考えられるもう一つの可能性は、シュミットが彼の先輩の考えを受けついでことである。その先輩とはウィーン言語学者フリートリッヒ・ミュラー (1834~1899) である。19世紀の後半、ミュラーは独力で世界の諸言語を記述するという大事業を遂行した [MÜLLER 1876-1888] し、また世界の民族を言語と身体形質の双方から分類した概説書を著した [MÜLLER 1879]。シュミットが言語学、民族学の研究を始めた19世紀末、20世紀初頭においてはミュラーはウィーンでは声名のある学者であったし、シュミットも批判はしつつも言語学上はミュラーに負う部分が少なくなかった [たとえば SCHMIDT 1899]。このミュラーはミャオ語をシャム語、シャン語、アホム語、カムティ語と並んでタイ語族に入れていたのであった [MÜLLER 1879: 25, 408-409]。シュミットがミャオ=ヤオ語をシャン、アホム、カムティなどと同一の群に入れたのは、ミュラーを踏襲したに過ぎないのかも知れないのである。

このような研究史的な詮索はともかくとして、私は二つのことを指摘しておきたい。

一つは、このようにミャオ=ヤオ語の所属について諸家の説が大きく分れている以上、現段階ではひとまずミャオ=ヤオ語族は一つの独立の単位として認め、性急に他の大語族と結びつけないのが賢明であろう。その点、エーバーハルト説は、ミャオ=ヤオという単位を認めず、またヤオ語をオーストロネシア語に属させるなど、遺憾な点が多い。

第二は、ミャオ=ヤオ語をタイ語ないしタイ=カダイ語に入れるシュミットやリードの考えが、もしももっともであるとすれば、長江以南の地域は、漢民族化が進行する以前は、ほとんどすべてタイ=カダイ系の言語が話されていたことになる。そうなることとエーバーハルトがこの地域の二つの大きな文化=民族系列として想定したチワン(タイ)諸民族(文化)とヤオ諸民族(文化)は、元来は近い関係にあったことになる。また黄恵焜の百越文化のような構想も理解しやすくなる。

しかし、まだミャオ=ヤオ語族の位置づけは決定していない。したがって、ここではこれ以上立入って論ずることはできない。

d. 巴と蛮と僚と

上に述べたように、ヤオ諸族にせよ、ミャオ諸族にせよ、その祖先は武陵蛮ないし

五溪蛮だと考えられている。ここで《蛮》との問題について少し考えてみたい。それにはまず巴諸民族について触れる必要がある。

エーバーハルトの巴群、ことに板楯蛮についての議論は極めて不充分である。一つは資料をよく読まなかったためか、板楯蛮をふくめた巴群については、始祖神話についての記述はあるが、物質文化についての記述がないと言っていることである [EBERHARD 1942a: 302-306]。あとで詳しく述べるように、李済が指摘したように、板楯蛮は弩をもっていた。そしてその板楯という名称も、板製の楯をもっていたからつけられた名称であろう。このように、彼は板楯蛮の文化の性格を充分理解できていなかったのである。そのため、李済のように板楯蛮と僚との文化的対照に気づかなかったのも不思議ではない。そして彼は『辺境諸民族』においては巴諸民族の共通の文化を再構成はしていない。巴諸民族は一群をなすが、統一的な起源ではない。彼らの主要部分はヤオ群から由来する。その上に羌要素が重層し、さらにチワン要素やことによるとリャオ要素も加わっているという [EBERHARD 1942a: 306]。

エーバーハルトが巴諸民族としてまとめたのは、南郡蛮（麋君蛮あるいは沔中蛮）にしても板楯蛮にしても四川省東部の嘉陵江流域の住民だった。同じ『後漢書』巻116、西南夷伝第76に出ている、四川省のさらに西に住む諸族、笮都夷、冉駹夷、白馬氏はすべて西方辺境諸民族において、しかもばらばらの個所で取り扱っている。つまり笮都夷はその他の西南諸民族の一つとして [k 129; EBERHARD 1942a: 165]、冉駹夷は西チベット族の一つとして [h 4; EBERHARD 1942a: 89]、そして白馬氏は羌諸民族の一つとして [g 32; EBERHARD 1942a: 76] である。これら蜀の地の三族をばらばらに所属させた根拠は不明である。ただし文化的には巴諸民族とはかなり相違し、より牧民的、チベットの性格をもっていたようであるから、巴諸民族と一緒に取り扱わなかったのはもっともである。そしてこれら諸民族は蜀の地でも平地民ではなくて山地民だった。しかし春秋時代には後述のように巴文化は四川西部平原に進出し、蜀文化と巴文化との混合が進んで巴蜀文化が成立していたから、『後漢書』に住民が記された時代には、平地においては巴と蜀とは文化的に見て、かなり等質化が進んでいたに違いない [徐 1993: 184]。

ところで、エーバーハルトは、中国を中心とする東アジアのほぼ全域における民族を分類整理しようとした。どうしても巨視的たらざるを得なかった。これに反して、限られた時代における一地域に焦点を合せて、そこに見られる対照的な文化をもつ民族を区別する試みは、より大きな地域、より長い期間に対しても大きな示唆を与えることがある。

その一例は、李済が『中国人の形成』の中で行なった試みである。つまり李済は『後漢書』巻116に記された板楯蛮と『魏書』巻101に記された獠の文化を比較し、それぞれが異なる文化複合をもっていたことを指摘したのであった。

板楯蛮については次のように記されている。

「板楯蛮夷は秦昭襄王の時、一白虎有りて常に群虎を従へ、数々秦、蜀、巴、漢の境に遊び千余人を傷害す。昭王は乃ち重ねて国中に募り、能く虎を殺す者は巴の万金百鎰を賞とす。時に巴群閬中の夷人に能く白竹の弩を作るもの有り、乃ち楼に登りて白虎を射殺す。昭王之を嘉せるも夷人を以て封を加ふるを欲せず、乃ち石を刻して盟要し、また夷人の頃田は租せず、十妻は算せず、人を傷く者は論じ、人を殺す者は俛銭を以て死を贖ふことを得せしむ。盟に曰く「秦夷を犯せば黄竜一雙を輸し、夷秦を犯せば清酒一鐘を輸す」と、夷人之に安ず。高祖に至りて漢王の為に夷人を発して、還りて三たび秦を伐つ。秦地既に定り、乃ち巴中に遣し、復其渠師の羅、朴、督、鄂、度、夕、襲の七姓、租賦を輸せず、餘戸は乃ち實錢口四十を歳入し、世々号して板楯蛮夷と為す」。

そして獠については次のとおりである。

「獠は蓋し南蛮の野種にして漢中より邛笮川洞の間に達し、所在皆有り。種類甚だ多く山谷に散居す。略々氏族の別無く又名字無し。生れる所の男女は只長幼次第を以て之を呼ぶ。其丈夫は阿暮阿段と称し、婦人は阿夷阿等の類、皆語の次第の称谓なり。(中略)ただ楯を執り矛を持ち、弓矢を識らず。(中略)其俗は鬼神を畏れ、尤も淫祀を尚ぶ。殺す所の人美鬚髻なる者は必ず其面皮を剥ぎ之を竹に簞み、燥するに及び之を号して鬼鼓と曰ひ、舞ひて之を祀り以て福利を求む。其昆季奴を売りて盡す者有るに至らば、乃ち自ら売りて以て祭に供す」。

李済はこの板楯蛮と獠を比較して、4、5世紀においては四川省には少なくとも二つの先住民の群があったと考えた。つまり、獠族は弓矢の知識がなかったのに対し、板楯蛮は白竹弩の製作者だった。獠には姓がなかったが、板楯蛮および巴蛮には姓があったからである。人身供儀が獠と巴蛮の双方で行なわれていたにも拘らず、一方の獠、他方の板楯蛮と巴蛮という二系列が考えられるという[李 1943: 358-361]。

私は李済のこの考えに賛成である。蛮について彼の説を補強する資料を一つあげておこう。

南朝のころ湖南、湖北、河南などで多くの集団に分れて住んでいた、いわゆる蛮の文化は『南齊書』巻58夷伝に、「布を衣、徒跣し、或は椎髻或は剪髪す。兵器は金銀を以て飾と為し、虎皮にて楯^おを衣い、弩射に便なり」とあって、四川の板楯蛮と同様、

楯をもち弩射に習熟していたのである。

エーバーハルトは板楯蛮の蛮という語について次のように記している。《蛮》man という語はフリッツ・イエガー [JÄGER 1933: 223] によるとヤオ語であって《人間》を意味している。槃瓠蛮と総称されるものは、大部分が事実ヤオ系の諸族 (m 群) であるが、中国人はこの蛮という字を2回、おそらくヤオ語以外の言語を話していたと思われる他の群にも用いている。一つはこの板楯蛮であり、もう一つは南平蛮 (p 群) であると述べている [EBERHARD 1942a: 303]。エーバーハルトの体系では、p 群とはリャオ群であって、唐代の南平蛮についてエーバーハルトは、純粋なリャオ族ではないらしいと記し、顧炎武の『天下郡国利病書』20では板楯蛮の7氏族と関係づけられていることを指摘し、これによるとヤオの影響もあったかと考えるなど、確たる見解をもてないでいる [EBERHARD 1942a: 243-244]。《蛮》の分類については、田継周の考えのほうが簡単明瞭である。漢代には荊州各郡と益州巴郡の少数民族は《蛮》と総称されたが、これらは彼らの歴史と社会の特徴に従って大体二系統に分けることができる。一つはいわゆる槃瓠の子孫であり、もう一つは廩君の子孫である。しかしこの二者の子孫は地区では大牙交錯してはいるものの、大体において槃瓠の子孫は武陵、長沙、零陵、桂陽の諸郡に、廩君の子孫は南郡、巴郡、江夏などの郡に住み、板楯と賁人は巴郡蛮の一部分あるいは後称である [田 1990: 181]。

ただ問題はこの両群の言語系統である。プーリーブランクは巴をミャオ＝ヤオ語系と考えた [PULLEYBLANK 1983: 422]。言語資料があるわけではなく、状況証拠によるものであるが、穏当なところであろう。蛮という文字は後には広くさまざまな系統の民族にも用いられるようになったが、漢代から南北朝にかけて蛮と呼ばれた諸民族は大体においてミャオ＝ヤオ語系だったのではないか、と思われる。これに対してリャオ族は、後のケラオ族などから見て、カダイ語族だった可能性が考えられる。将来ことによると地名研究の進歩によって、この問題は新しい光が投げられるかも知れない。私はその可能性に期待をもっている。

また巴の文化の研究において、エーバーハルトの研究が不満足なものであることはさきにも述べた。この点を改善する一つの方法は巴の子孫と考えられる現存少数民族の文化を参考にすることである。

つまりエーバーハルトが巴諸民族として挙げた民族は、みな古代 (大部分は漢代) の民族である。彼は巴諸民族は早く漢民族の中に溶け込んでしまったと考えた。しかし、後世にも巴諸民族の系統を引いた民族が少数民族として存続していた可能性は充分考えられる。そのような意味において私が注目しているのは土家族である。『辺境

諸民族』では、『その他の南方諸民族』の中に土人（明代？）として記されたもの [c48; EBERHARD 1942a: 363-364] が土家族に当るのかも知れない。土家族の起源については巴人説以外にも烏蛮の一部だとか、唐末五代初年に入った百芸工匠の子孫だという説もあるが、私は白虎崇拜などの理由で、巴人説は蓋然性が高いと思っている [『中国少数民族』編写組 1981: 544; 彭 1990]。古代の巴文化の再構成には、エーバーハルトが利用しなかったこの土家族の民族誌的資料も極めて興味深く、価値あるものであろう。

古代巴の文化の研究には、民族学的立場からの研究と並んで、否、より重要な研究方法として考古学的立場からの研究がある。

ここで興味深いのは、エーバーハルトが巴諸民族と呼んだものの文化は、考古学的にも対応するものが認められることである。つまり春秋前期に広がった巴文化ないし巴蜀文化である。徐朝竜によれば、（１）虎を崇拜し、兵器を好み、軍事的色彩が濃厚である。（２）淳于、鉦、編鐘といった楽器を操り、音楽を得意とする。（３）多くの面において揚子江中流域の大国である楚の文化から強い影響を受けている。（４）《巴蜀図語》または《巴蜀文字》と呼ばれる準文字システムが発明された。（５）船を棺にして死者を埋葬する風習があった。

「この文化は元々、「巴」と呼ばれた四川東部の丘陵地に展開し、普通「巴文化」と名付けられている。戦闘に強く、音楽を得意とした巴文化の担い手「巴人」たちは、古く西周初期から殷を滅ぼす戦争にも駆り出され、勇敢な戦いでその名をはせた。彼らは「歌舞を以て殷人を凌ぐ」と、古代文献に記録されている。

春秋時代には東方大国で「五覇」の一つである楚と抗争を繰り返し、楚の勢力の西進を堅く阻んだ。同時に彼らは楚の都近くに大量に住み着き、「下里巴人」として知られ、文化的に楚と深くかかわった。その彼らが西へ川西平原に進出したのは、おそらく抗争に敗れ、楚の圧迫を受けていたからと見られている」。

巴文化は川西平野を支配下に置き、巴と蜀の文化の混合が進み、この時期から秦の統一までの時代の文化は巴蜀文化と呼ばれている [徐 1993: 181-184]。

おそらく、漢代およびそれ以前の蛮や僚の文化を考える場合、このように考古学的に明らかにされた巴文化との関係を考慮に入れる必要があるだろう。

次にリャオについてもつけ加えておきたいことがある。それはリャオとタイ系民族との関係についてである。

エーバーハルトは中国の学者、たとえば林惠祥 [1936: 第16章] や胡耐安 [1964: 227-252] が僂僄系として一括した諸民族を、チワン諸民族、リ諸民族、ケラオ諸民

族、リャオ諸民族、白蛮諸民族というように五つに分け、別々に取り扱った。その中でチワン諸民族を重要視し、他の民族群もチワン文化と文化的に親縁であるか、あるいはチワン文化の要素を多く含むことを考えたが、それでも別々の群をなすと見なすのを適当と考えた。

私は、エーバーハルトのこの見解はもっともであると賛成したい。それは彼は、これら諸民族を文化内容から見てそれぞれ別個の文化複合の担い手と見たからで、文化複合を基準として判断する限りにおいては、これらを別々と考えるのは当然だと私も判断するからである。

ただここで問題となるのは、これら民族群が記録された年代が同じでないで、これら諸群を並列してよいか否かという点である。具体的に言うと、リャオ諸民族とチワン諸民族、ケラオ諸民族の関係が問題である。つまり彼がリャオ諸民族としてまとめた諸民族は、彼がその年代は漢代から現代に至ると記しているにも拘らず [EBERHARD 1942a: 246]、ある程度詳しい文化内容の記述のあるのは、飛頭獠、獠、南平蛮の三つであって、漢代から唐代に存在していた諸族である [EBERHARD 1942a: 237-244]。それに対してチワン諸族の資料は、宋代から現代にかけてのものである [EBERHARD 1942a: 176-192, 195]。またケラオ諸民族については彼はあまり資料をもっておらず、しばしば数種のいわゆるミャオ・アルバムという図録を用い⁶⁾、時代は大部分、疑問符をつけて明代かといい、ただケラオ族だけは宋代かと考えている [EBERHARD 1942a: 229-235]。

6) エーバーハルトは、本書においては、チワン、ケラオ、ミャオなどのところで数種の《ミャオ・アルバム》を使用している。それらアルバムは、
Album Hahn: Miao-tse-Album. 以前ベルリンの I. Hahn 嬢（エドゥアルト・ハーンの妹の Ida Hahn か？）が所蔵していた彩色画でテキストつき。
Album I. D. 8756: Miao-tse-Album. ベルリン民族学博物館所蔵で彩色画でテキストつき。
Album I. D. 10825: Miao-tse-Album. ベルリン民族学博物館所蔵で彩色画でテキストつき。
Album O. As. 6979. 雲南諸民族のアルバムで、ライプツヒ民族学博物館所蔵で彩色画、注記つき。
Album X.: Miao-tse-Album. 彩色画で注記あり。ベルリンの個人所蔵。
Bilder I. D. 24957. ベルリン民族学博物館所蔵の、貴州省の諸民族の絵ののった一連の巻物 [以上 EBERHARD 1942a: 491]。
Gotha-Album: Miao-tse-Album. ゴータの城内にあるかつての公爵立博物館所蔵。内容は Chiu [1937] に紹介 [EBERHARD 1942a: 494]。
ライプツヒ民族学博物館所蔵の複数の《ミャオ・アルバム》。内容は Eberhard [1940] に紹介 [EBERHARD 1942a: 500]。
である。

これらのアルバムは、台湾に残された『黔苗図説』や大陸に残された『百苗図詠』の類であるが、佐々木利和氏によるアイヌ絵の研究のように [SASAKI 1993]、専門家によるこれらのアルバムの本格的な研究が望まれる。なおドイツにおける《ミャオ・アルバム》研究の先駆的業績としては Jäger [1915-1918] がある。

つまりエーバーハルトがリャオ文化としてまとめた文化複合は、チワン文化やケラオ文化よりも時代的に古いものなのである。したがって、それぞれが異なる文化複合であることを認めた上で、これらの間に系譜的な関係はないか、という問題設定が可能である。

リャオ諸族とケラオ諸族との間については、彼自身、ケラオ文化はことによると、チワン文化やヤオ文化の要素が著しく重層したリャオ文化だと見なしてよいだろうと考えていた。この想像は私も基本的に賛成である。中国の学者も、たとえば『中国少数民族』も次のように現代のケラオ族は古代の《僚》と関係があることを認めた。

「唐、宋の時、史書に始めて《葛僚》、《仡僚》、《佶僚》、《革老》、《仡佬》などの名称が現れ、まとめて《僚》と呼んだ。僚人はおそらく古代においてこの一地区の若干の少数民族の汎称であって、ケラオ族とはさらに直接的な密接な関係をもっていた」【『中国少数民族』編写組 1981: 490; なお胡耐安 1964: 239参照】。

これに反して、より難問は、リャオ諸族とチワン諸族との関係である。エーバーハルトは、チワン文化とリャオ文化との間の文化的相連を強調し、両者は本来無関係で、その分布領域の南部でリャオはチワン文化の影響を受けたのだと解釈した。しかし、彼がリャオ文化、チワン文化の資料としたものには時代的な差があるから、彼のように両者を並列して取り扱うのは適切でない。それにしてもエーバーハルトが仮説的にリャオ文化とチワン文化の両方を再構成し、別個の文化複合であることを指摘したのは、その限りにおいては一つの功績だったと言わなくてはならない。

e. 番とは何か

エーバーハルトの構想において、ミャオ＝ヤオ群と密接な関係のある民族群の一つは彼が西方辺境諸民族の第二の群としてまとめた番諸民族である。そこでこの番諸民族について少し詳しく考えてみたい。彼によれば、この群は文化的には羌群に近く、他方、南方諸文化とも関係をもち、重層されてできた群だという。さらにミャオ族は番族の子孫がヤオ族化し、それはリャオやタイによって影響を受け、最後にチベット族によって重層されてできたのだという。

この番諸民族小群は、他の研究者の分類には見られない彼独自のものである。《——番》という名の、あまり知られていない諸民族を中心として近くの民族を一括したものであって、吐蕃とか西蕃という蕃のつくチベット＝ビルマ系諸族とのアナロジーから考えれば、これら諸族を西方諸民族の中の一小群としてまとめたことは理解できる。

しかし、——番という名がついていても、それが果してチベット＝ビルマ語族に属することを直ちに意味するか否かは別問題である。ことに宋代においては羌も蛮とか夷と呼ばれたように[冉ほか 1984: 214]、非漢民族の呼び方も混乱しており、番という方を使っていたからと言って、西蕃などと同系という保証はないからだ。

そればかりでなく、彼が番としてまとめた諸群がチベット＝ビルマ系と呼んでよいかどうか問題がある。近年の中国学者の研究によると、むしろ、その多くについてはいわゆる僚であってタイ＝カダイ系の疑いがあるのだ。

つまり張雄によれば、思州、播州、野州所領の諸羈縻州と叙州以南（今の四川省東南、湖南省西南および広西西北辺縁地区）は、もとは牂柯蛮、俚僚、それに武陵蛮夷の南部一支の分布地域だった。この一地区の少数民族は、かつては僚とまとめて呼ばれ、唐宋の時代には、東謝蛮、西趙蛮、西南蕃、南江蛮、誠徽州蛮（飛山蛮）、撫水蛮、環水蛮、あるいは夷子、佶伶、峒蛮と称した。布依、侗、水などの族の別称あるいは蔑称である[張 1989: 240]。

また彼は東謝蛮や西趙蛮などについては、野州都督所領の諸羈縻州の諸蛮は、分れて大姓酋師に率いられているが、その部落には僚人の文化特徴を保留しており、僚と夷子が部民の主な組成部分で、そのほか苗蛮の部落がその間に雑居していたとも論じている[張 1989: 204]。

また尤中によれば、唐代に東謝、南謝、西趙の首領などが統轄した境内は、守宮僚と夷子を除くと、仡佬族、苗族と、まだ僚族から分出していない水族と侗族の前身が住んでいた。これが宋代になると、守宮僚という名が消え、夷子という名は残り、新たに仲家という名称が出現した。唐代の謝氏、趙氏は淪落して一般の頭目になり、これに代って起ったのは、竜氏を首とする竜、方、張、石、羅、程、韋の七姓の貴族で、この他の統治にあたり、《西南七蕃》と号した。その地域は今の四川省東南、四川省南部から四川省西南一帯を包括しているという[尤 1985: 218-219]。

系統論以外に重要なのは、これら諸族が一定の時代に置かれた民族間関係であり、政治史的、経済的地位である。

エーバーハルトが番として分類したもののかなりの部分は、唐や宋の時代に、唐や宋の王朝と南詔、大理国の中間地帯に居住する人たちであった。つまり尤中の『中国西南民族史』によると、このような民族のあるものは唐や宋に羈属し、唐や宋がその地に羈縻州、県を設置すると、その首領を刺史や県令にした。またある者は南詔・大理に依附したが、南詔や大理もそれら民族の元来の組織は変えないで、その首領を部長とした。しかし、唐、宋や南詔・大理の彼らに対する統制が弛んだ時には、何人か

の首領は独立して王と称し、その地を国と称した。このような現象は宋代に著しく、羅氏鬼国や自杞国がその例である。范成大の『桂海虞衡志』志蛮は次のように記されている。

「南方を蛮と曰ふ。今郡県の外、羈縻州洞、故皆蛮地と雖も、猶ほ省民に近く、税役を供し、故に蛮を以て之に命せず。羈縻州を過ぎて則ち之を化外と謂ひ、真の蛮なり。…種類殊に詭^{ことな}り、勝げて記すべからず。今その桂林に近き者を志せば、宜州（今の広西宜山）に西南蕃有り、大小張、大小王、龍、石、滕、謝諸蕃（今の四川省南部の布依族苗族自治州一帯）、地は牂牁と接す。…又南は邕州南江の外に連る者は、羅殿、自杞等国を以て名づく。羅孔、特磨、白衣、九道等は道を以て名づく。而して峨州（今の広西天峨）以西は、別に酋長有りて、統属する所なき者は、蘇綺、羅坐、夜面、計利、流求、万寿、多岭、阿諤等の蛮にて、之を白蛮と謂ひ、酋は自ら太保と謂ひ、大抵は山僚と相似るも、但^{ただ}首領有るのみ。羅殿等の処は乃ち聚落を成し、亦文書公文有り、守殿を殿固王と称す。其外又大蛮落有り、西を大理と曰ひ、東を交趾と曰ふ」。

このように独立ないし半独立の集落の中で最大のものが羅殿と自杞で、したがって国を名のったのである。そして羅殿は《羅氏鬼国》のことである【尤 1985: 196-197】。

ここで重要なのは、番諸族が一方では進出してくる漢族、他方では雲南の南詔、大理王国という二つの大きな政治勢力の中間に位置していたことから生ずる民族間関係である。

岡田宏二によると、宋代には中国側は大理国との交易を通じて軍馬を買い入れたが、その際、大理国と宋の中間に位置する非漢民族を媒介とした中継交易の形式をとることが最も望ましかった。そこで中間地帯に居住する非漢民族の存在は宋朝にとって極めて重要となり、彼らをいかに利用するかが、馬政の成否にも直接影響を及ぼしたのである【岡田 1993: 190; なお塚田 1983を参照】。

そして横山寨に馬を売りに来た羅殿国、自杞国、特磨道などの諸蕃の身体形質や衣食は『文献通考』巻328・四裔5、充州の条に収められた『桂海虞衡志』に出ており、胡起望と覃光広によれば、宋代の彝族で、自杞・羅殿を指している。さらに両氏によれば羅殿国は唐代に貴州省西南部に一部の彝族が建てた地方政権で、自杞国は唐宋時代に一部の彝族が建てた地方政権で、現在の雲南省曲靖地区南部と紅河州東北部で、現在昆明の南の名勝石林附近にすむサニ族（彝族撒尼系）は、宋代の自杞国の後裔だという。特磨道は雲南省文山州広南県一帯にあたり、宋代には主に農氏の貴族が居住

していたという [胡・覃 1986: 215-216, 218; 岡田 1993: 219-220に引用]。

このようにして見てくると、エーバーハルトの番群の構想は、到底そのままの形で採用することは困難なことが明らかである。恐らくチベット＝ビルマ系の民族とタイ＝カダイ系の民族が一括されたい。このような番群から出発してミャオ族の形成を説く彼の説が、確固たる土台の上に立っていないことは言うまでもない。

f. 白蛮と烏蛮

エーバーハルトは雲南の44民族を白蛮諸民族としてまとめ、広西のチワン族に大変近い関係にあるタイ系の諸民族だと考えた。しかし、彼の白蛮諸民族という分類については、問題にすべきいくつかの点がある。

第一は白蛮諸民族としてまとめられているのは、いかなる民族であるか、という問題である。言語系統という点から言えば、白蛮諸民族は一色ではない。大きく見て二系統の民族を一括している。つまり、彼が白蛮諸民族と呼んだものは、昔の白蛮の子孫と思われるペー族のようなチベット＝ビルマ系民族ばかりでなく、タイ（傣）族のようなタイ系統の民族も多く含んでいる。その点においては、彼が白蛮諸民族をタイ系と考えたのはもっともである。雲南諸民族の言語系統の研究が未熟だった当時に本書が書かれたのであるから、白蛮諸民族のこの取り扱い方は理解できるものである。

私はエーバーハルトが白蛮諸民族と称したものは、歴史的に見て二つの中心とその衛星諸族からなる民族間体系をなす諸民族ではなかったか、と思っている。つまり一つは唐から元にかけては洱海の西岸を本拠とするチベット＝ビルマ系支配者をいitたく南詔、大理という国家機構と、その勢力下の必ずしもチベット＝ビルマ系だけには限られない諸民族の体系である。大理の崩壊後は、それに代る強い核がないルースな民族群となった。もう一つは西双版纳における平地のタイ（傣）諸王国を核とし、山地諸民族をその配下におさめた民族間体系で、明、清代から20世紀初頭まで存在していたことが知られている。

エーバーハルトの白蛮諸民族とは、この二つの民族間体系を一括したものであり、それぞれの内部はかなり複雑であり、決して等質的ではなかった。それにも拘らず、平地居住の水稲耕民としては、両体系とも文化的に多くの共通点があった。エーバーハルトが白蛮文化として注目したのはそれだったのである。

第二の問題は、白蛮と烏蛮との関係である。

エーバーハルトはB西方諸民族の中で烏蛮をチベット [=ビルマ] 語系民族として取り扱い、C南方諸民族の中で白蛮を取り上げ、これをタイ語系民族だったと考え

ている。これも今日の研究段階から見れば物足りない。烏蛮がチベット＝ビルマ系というのはそれでよいが、白蛮諸民族全体でなく白蛮自体はタイ系ではなくて、やはりチベット＝ビルマ系と見るべきであろう。少なくともその支配者層はそうであろう。筆者には諏訪哲郎の次の説が示唆に富むと思われる。それによれば、チベット＝ビルマ系の言語を用いる土着の農耕民が住んでいたところに、北方から南下した少数の羌族系の牧畜民が、その上に支配層として君臨した集団が烏蛮である。それに対して、チベット＝ビルマ語を用いる土着の農耕民の中に、四川方面から漢民族が徐々に浸透して融合し、漢族文化を相当受容した集団が白蛮である〔諏訪 1988: 133-134〕。

諏訪のこの興味深い解釈もまだ極めて仮説的な段階にある。けれども、白蛮は烏蛮と切り離さず、関連したものとして取り扱うべきこと、また漢化という要因をエーバーハルト以上に考慮に入れるべきであるという二点においては、私は諏訪に賛成である。ただチベット＝ビルマ語族、ことにいわゆるロロ群の民族史、文化史については、未解決の問題が多いことをここで指摘しておきたい。

6. 結 論

以上、私はエーバーハルトの『辺境諸民族』における中国南部の諸民族について検討を行ってきた。

まず認めなければならないことは、これが完成した1940年という年代を考えると、前人未踏の領域を開拓した記念すべき先駆的業績であることである。しかも、中国研究には不便なアンカラでこの古典が完成されたということを考えると驚異的すらある。取り上げた民族の数、利用した膨大な資料、そして大きな見通しはまさに圧倒的である。そして諸民族群をそれぞれ異なった文化複合として把握しようとする努力は、この本に東アジアの歴史民族学的研究の古典としての価値を与えている。

具体的には、華南諸民族の多くを文化的に見て焼畑耕作のヤオ文化と水稻耕作のチワン文化という二つの大きな系列にまとめようとしたのは、すぐれた着想であった。しかし、リャオ文化の位置づけは、問題を残している。また越諸民族と巴諸民族を南方辺境諸民族の一部として論じたのは、当時とすれば卓見であった。巴諸民族の文化複合をとり出すのには彼は成功していないが、越文化についての彼の構想は示唆に富んでいる。

このように全体としてすぐれた面が大きいが、欠点や不満な個所も少なくない。まず資料の吟味が不十分なことは、資料集としての本書の価値をある程度傷つけている。

また具体的な民族群の取り扱いでは、ミャオ諸民族とヤオ諸民族とを同一語族なのにも拘らず別個に取り扱い、ミャオ＝ヤオ群としてまとめる視点を出さなかったのは、やはり一つの限界である。また白蛮を烏蛮と切り離して見る行き方にも問題がある。また楚のように個性ある大きな文化を越文化の中にも含めることも問題であろう。一般に彼は語族の問題について考慮が足らず、諸民族群と語族との関係についての彼の説は、ヤオと越がオーストロネシア語族、リャオ群がオーストロアジア系というように問題が多い。それよりも大きい欠点は、漢民族との民族間関係を充分留意しなかったこと、同一民族の歴史的变化を考慮することが少なかったことである。ことに唐宋ごろ多くの華南の民族で焼畑耕作から水稻耕作への移行が行なわれたことは、リャオ文化からチワン文化への変化の可能性も考えさせ、経済形態をもって民族や文化の系統を考えようとする彼の立場の有効性には限界があることを示している。

このようにエーバーハルトの研究には、今日から見れば批判すべき点は多い。それにも拘らず、この本は中国の民族史、文化史にとって基本的な古典である。私はこの本をくり返し読むたびに、問題の所在や、解決のための着想など、新しく学ぶところがあつた。他の人もこの本をじっくり読むならば、おそらく同様な感想をもつ人が少なくないであろう。その意味において本書は常に新しい古典である⁷⁾。

文 献

CHIU, Chang-kong

- 1937 Die Kultur der Miao-tse nach älteren chinesischen Quellen. *Mitteilungen aus dem Museum für Völkerkunde in Hamburg* 18, Hamburg: Friederischen, de Gruyter. (Ming-jen tsing-sieh Miao-Man t'u)

張 雄

- 1989 『中国中南民族史』南寧：広西人民出版社。

『中国少数民族』編写組

- 1981 『中国少数民族』北京：人民出版社。

CRESSEY, George Babcock

- 1934 *China's Geographic Foundations*. New York: McGraw Hill. (クレッシイ著、高垣勲次郎訳『支那満洲風土記』東京：日本外事協会、1935)

田 継周

- 1990 「第一編 從遠古到秦漢の統一」翁独健主編『中国民族関係史綱要』北京：中国社会科学出版社、pp. 18-191。

EBERHARD, Wolfram

- 1937a *Typen chinesischer Volksmärchen*, *FF Communications* Nr. 120. Helsinki.

- 1937b Eine neue Arbeitshypothese über den Aufbau der frühchinesischen Kulturen. *Tagungsbericht der Gesellschaft für Völkerkunde*, 2. Tagung in Leipzig 1936: 90-107.

- 1937c Die Struktur einer mittelchinesischen Lokalkultur. *Artibus Asiae* 7: 87-91.

7) 小論のいくつかの点について教示を吝しなかった塚田誠之氏に感謝する。

- 1938 Early Chinese Cultures and Their Development. *Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution* for 1937: 513-530. (1937b の英訳)
- 1940 Die Miao-tse-Alben des Leipziger Völkermuseum. *Archiv für Anthropologie*, N.F. 26: 125-137.
- 1942a *Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas*. *T'oung Pao Supplement* zu Bd.36. Leiden: E. J. Brill.
- 1942b *Lokalkulturen im alten China. Teil 1: Die Lokalkulturen des Nordens und Westens*. *T'oung Pao Supplement* zu Bd. 37. Leiden: E. J. Brill.
- 1942c *Lokalkulturen im alten China. Teil 2: Die Lokalkulturen des Südens und Ostens*. *Monumenta Serica, Monograph III*. Peking.
- 1968 *The Local Cultures of South and East China*. Leiden: E. J. Brill. (エーバーハルト著, 白鳥芳郎監訳『古代中国の地方文化 華南・華東』東京: 六興出版, 1987)
- FORREST, R.A.D.
1948 *The Chinese Language*. London: Faber & Faber.
- 傅 懋勳
1957 「少数民族の文字の制定と改革」『人民中国』1957 (2): 9-12.
- HAUDRICOURT, A. G.
1966 The Limits and Connections of Austroasiatic in the Northeast. In N. H. Zide (ed.), *Studies in Comparative Austroasiatic Linguistics*, The Hague, pp. 44-56.
- 彭 繼寬
1990 「土家族的宗教与神話」《中国各民族宗教与神話大詞典》編審委員会編『中国各民族宗教与神話大詞典』北京: 学苑出版社, pp. 578-580.
- JÄGER, Fritz
1915-1918 Über chinesische Miaotse-Alben. *Ostasiatische Zeitschrift* 4 (1915-1916): 266-283, 5 (1916-1918): 81-89.
1933 Die Bedeutung der ethnischen Bezeichnungen „Yao“ und „Man“. *Ostasiatische Literaturzeitung* 36: Sp. 223-226.
- 徐 朝竜
1993 「三星堆文明の真実と巴蜀文化の歩み」徐朝竜・NHK 取材班編『謎の古代王国三星堆遺跡は何を物語るか』東京: 日本放送出版協会, pp. 149-188.
- 黄 惠焜
1992 『從越人到泰人』昆明: 雲南民族出版社。
- 胡 起望・覃 光広
1986 『桂海虞衡志輯佚校注』成都: 四川民族出版社。
- 胡 耐安
1964 『中国民族志』台北: 台湾商務印書館。
- MASPERO, Henri
1952 Les langues tibeto-birmanes. In Antoine Meillet et Marcel Cohen (eds.), *Les langues du monde*, 2. ed., Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 529-570.
- MÜLLER, Friedrich
1876-1888 *Grundriß der Sprachwissenschaft*. 3 Bde. und Supplement. Wien.
1879 *Allgemeine Ethnographie*. Zweite umgearbeitete und bedeutend vermehrte Auflage. Wien: Alfred Hölder.
- 大林太良
1993 「江南の山地文化を知りたい」『比較民俗研究』1: 1-3。
1995 「中国辺境諸民族の文化と居住地——エーバーハルト説の紹介と評価 (そのⅠ. 概観)——」『国立民族学博物館研究報告』20 (2): 313-356。
- 岡田宏二
1993 『中国華南民族社会史研究』東京: 汲古書院。
- PULLEYBLANK, E. G.
1983 The Chinese and Their Neighbors in Prehistoric and Early Historic Times. In David Keightley (ed.), *The Origins of Chinese Civilization*, Berkeley: University of California Press, pp. 411-466.

- REID, Lawrence A.
 1992 Recent Hypotheses Regarding the Linguistic Relatedness of Southeast Asian Languages. Paper presented at a seminar on the history of Southeast Asia, at the Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Languages.
- 李 济
 1943 『支那民族の形成』東京：生活社。
- 林 惠祥
 1936 『中国民族史』上海：商務印書館。（大石隆三・中村弘訳『支那民族史』上下，東京：生活社，1939）
- 劉 義棠
 1969 『中国辺疆民族史』台北：台湾中華書局。
- 崎山 理
 1990 「越語資料」崎山理編『日本語の形成』東京：三省堂，pp. 457-483。
- SASAKI, Toshikazu
 1993 On Ainu-e: Pictorial Descriptions of Ainu Life and Customs. In Josef Kreiner (ed.), *European Studies on Ainu Language and Culture*, München: Iudicium, pp. 217-227.
- 佐竹靖彦
 1967 「宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題（上）」『史林』50: 801-828。
 1968 「宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題（下）」『史林』51: 44-74。
- SCHMIDT, Wilhelm
 1899 Die sprachlichen Verhältnisse Oceaniens (Melanesiens, Polynesiens, Mikronesiens und Indonesiens) in ihrer Bedeutung für die Ethnologie. *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien* 29: 245-258.
 1926 *Die Sprachfamilien und Sprachenkreise der Erde*. Heidelberg: Carl Winter.
- 蔣 炳釗（編）
 1988 『畚族史稿』厦門：厦門大学出版社。
- 諏訪哲郎
 1988 『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性——神話と言語から見た納西族の原像——』（学習院大学研究叢書16）東京：学習院大学。
- 鈴木満男
 1994 『環シナ海の古代儀礼』東京：第一書房。
- 竹村卓二
 1981 『ャオ族の歴史と文化——華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究——』東京：弘文堂。
 1994 「ャオ族の〈家先単〉とその運用——漢族との境界維持の視点から——」竹村卓二編『儀礼・民族・境界——華南諸民族「漢化」の諸相——』東京：風響社，pp. 13-50。
- THURNWALD, Richard
 1931 *Die Menschliche Gesellschaft*. I. Band: *Repräsentative Lebensbilder von Naturvölkern*, Berlin: Walter de Gruyter & Co.
- 塚田誠之
 1983 「唐宋時代における華南少数民族の動向——左・右江流域を中心に——」『史学雑誌』92 (3): 40-66。
- YAHONTOV, S. E.
 1964 *Glottochronology and the Sino-Tibetan Linguistic Family*. The VII. International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences. Moscow.
- 『瑤族簡史』編写組
 1983 『瑤族簡史』南寧：广西民族出版社。
- 尤 中
 1985 『中国西南民族史』昆明：雲南人民出版社。
- 冉 光榮・李 紹明・周 錫銀
 1984 『羌族史』成都：四川民族出版社。